バンッ！ バンバン！ バンッ！ バスンッ！ バゴンッ！ ガチャアンッ！
トレーニングルームに鈍い連続音が響く。
『あっちゃ～、またやっちゃったあ…』
トレーニングで汗を滴らせたマルタさんが
『マルタさんのパンチで哀れなボロくずとなったサンドバッグが床の上に横たわっている。
おっほん…、見てらしたんですね。
もっと弱体化させてからでダメですか？』
あ、ボクシンググローブを壊すものだから、マスターは興味があるんですか？』
マスターはボクシンググローブを壊すものだから、マスターは興味があるんですか？』
『よければ私とヤってみますか？ な～んて♥』
マルタさんが何気なく笑顔で冗談交じりに言ったその言葉に、俺は思わずドキドキしてしまったのだ。

人気のない深夜のリング…、
そこでマルタさんがウォームアップしながら俺を待っていた。
「来ましたね♥ ふふっ、深夜のリングで男と女がふたりきり…
それでやる事と言ったら…
ボックスしかないですよね♥」
(こうやって改めてマルタさんのビキニ姿を真正面から見ると…
つくづくエッチな身体してるなあ…)
思わず股間に血液が滾ってしまいそうになる
「さあ、リングに上がって♥
ちゃんと手加減してあげますからね♥」

人気のない深夜のリング…、
そこで私はウォームアップしながらマスターを待っていた。
「来ましたね♥　ふふっ、深夜のリングで男と女がふたりきり…
それでやる事と言ったら…
ボックスしかないですよね♥」
（私とボクシングしてみたいだなんて、
マスターも大概命知らずですね…
そんな無謀な所も気に入ってますけど♥）
「さあ、リングに上がって♥
ちゃんと手加減してあげますからね♥」

ぎゅっ

『約束通り、霊基の出力を最低まで落としてもらいました♥
レベル1ですよ？　これで私も普通の女の子と変わらないですね♥
これでマスターとボクシング出来ますよ♥』
マルタさんがにっこりと無邪気な笑顔を向けてくる
ニヤッ
（自分で普通の女の子とか言っちゃうあたりがマルタさんだなあ…）
『マスター、何か失礼なこと考えてませんか？』『ひえっ…』
『ほらほら、普通の女の子とボクシングして
負けちゃうのが怖いんですか？大丈夫ですよ、マスターだって
こんなに鍛えた筋肉がついてるんだから、自信を持って♥』
そう言ってマルタさんが俺の腹筋を
グローブ越しにさわさわと撫でてくる

「約束通り、霊基の出力を最低まで落としてもらいました♥
レベル1ですよ？　これで私も普通の女の子と変わらないですね♥
これでマスターとボクシング出来ますよ♥」
ニヤッ
（微妙な表情…）
「マスター、何か失礼なこと考えてませんか？」「ひえっ…」
「ほらほら、普通の女の子とボクシングして
負けちゃうのが怖いんですか？大丈夫ですよ、マスターだって
こんなに鍛えた筋肉がついてるんだから、自信を持って♥」
そう言ってマスターの腹筋をグローブ越しにさわさわと撫でて確かめる
（うんうん、これなら本気でパンチ打っても大丈夫そうね♥）
私はマスターが頼もしくてつい嬉しくなってしまう

モゴ
モゴ
カプッ

二人、自分のコーナーに分かれて準備を整える
俺はグローブとマウスピースの調子を確かめた

カポッ

『私はレベル1になっちゃいましたけど、
マスターのレベルはいくつでしたっけ？
150？160？
これだけハンデがあって
負けるわけにはいかないわよね♥』
そう言いながらマウスピースを咥えるマルタさん

モゴ

モゴ

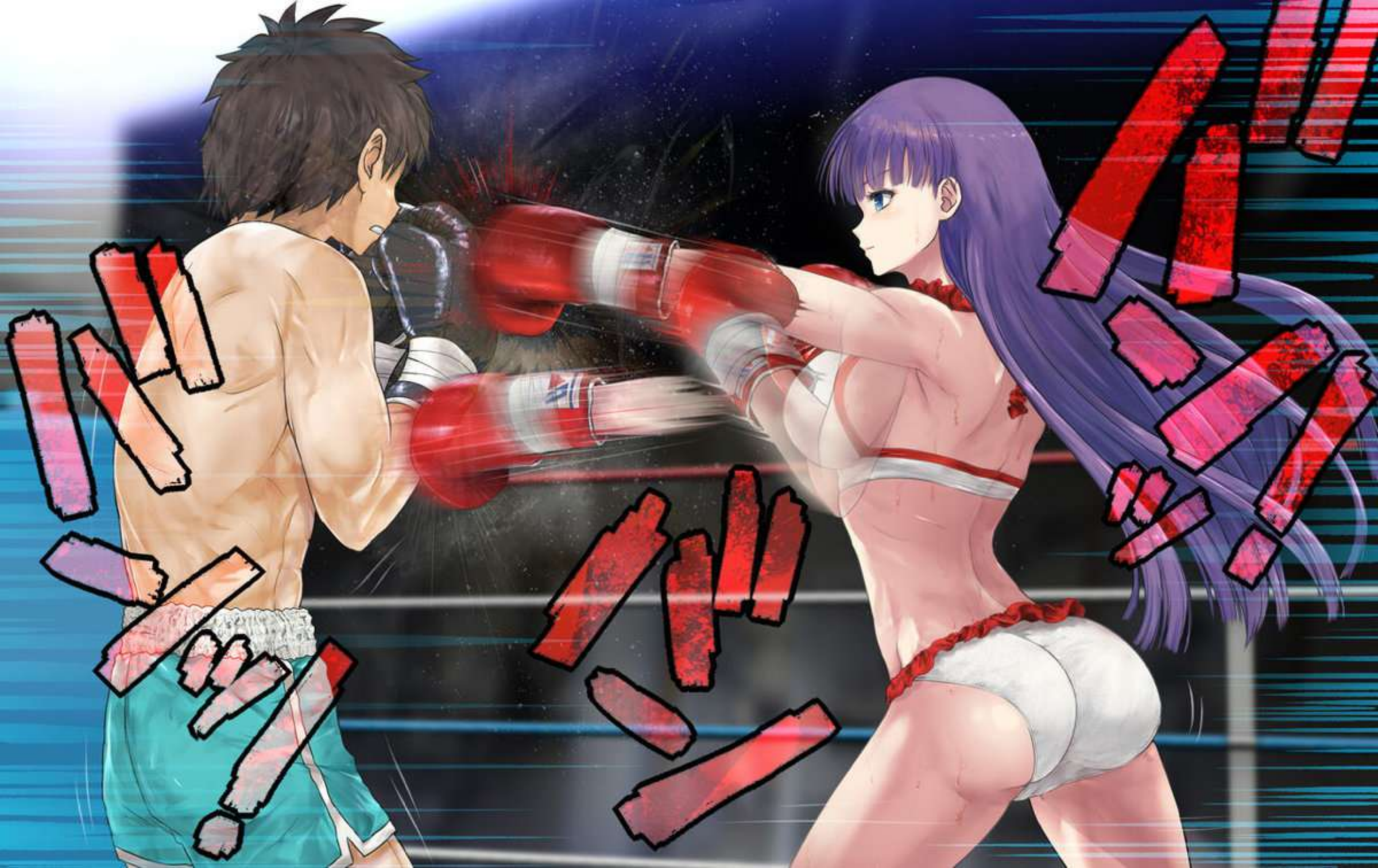
（マスターレベルとは違うと思う…）
マルタさんがゴングのタイマーをセットして
二人ともリングの中央へ向かう

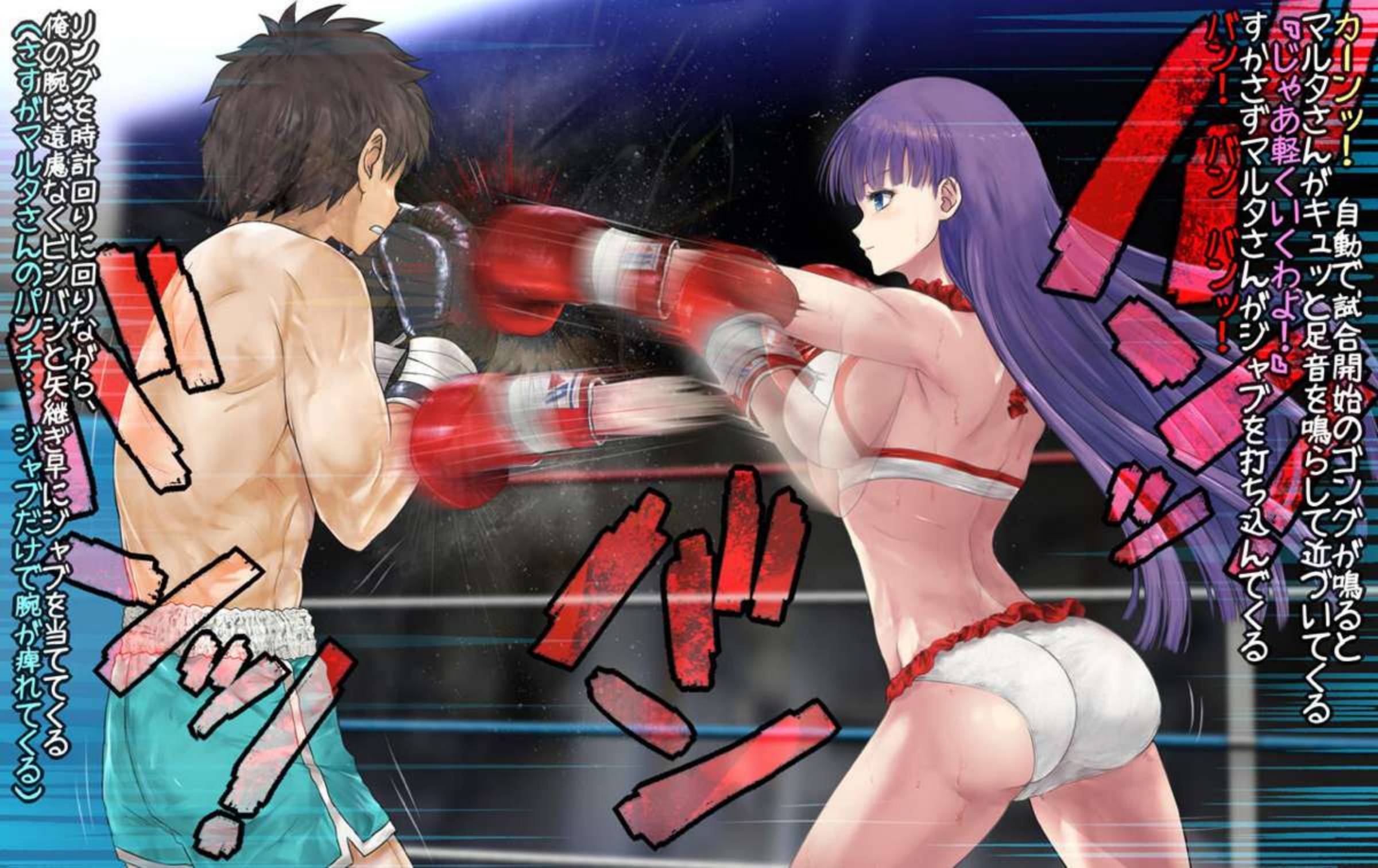
二人、自分のコーナーに分かれて準備を整える
マスターはグローブとマウスピースの調子を確かめている
カポッ
『私はレベル1になっちゃいましたけど、
マスターのレベルはいくつでしたっけ？
150？160？
これだけハンデがあって
負けるわけにはいかないわよね♥』
そう言いながらマウスピースを咥えた
モゴ
モゴ
（楽しませてもらいましょう♥）
私はゴングのタイマーをセットして
二人ともリングの中央へ向かう

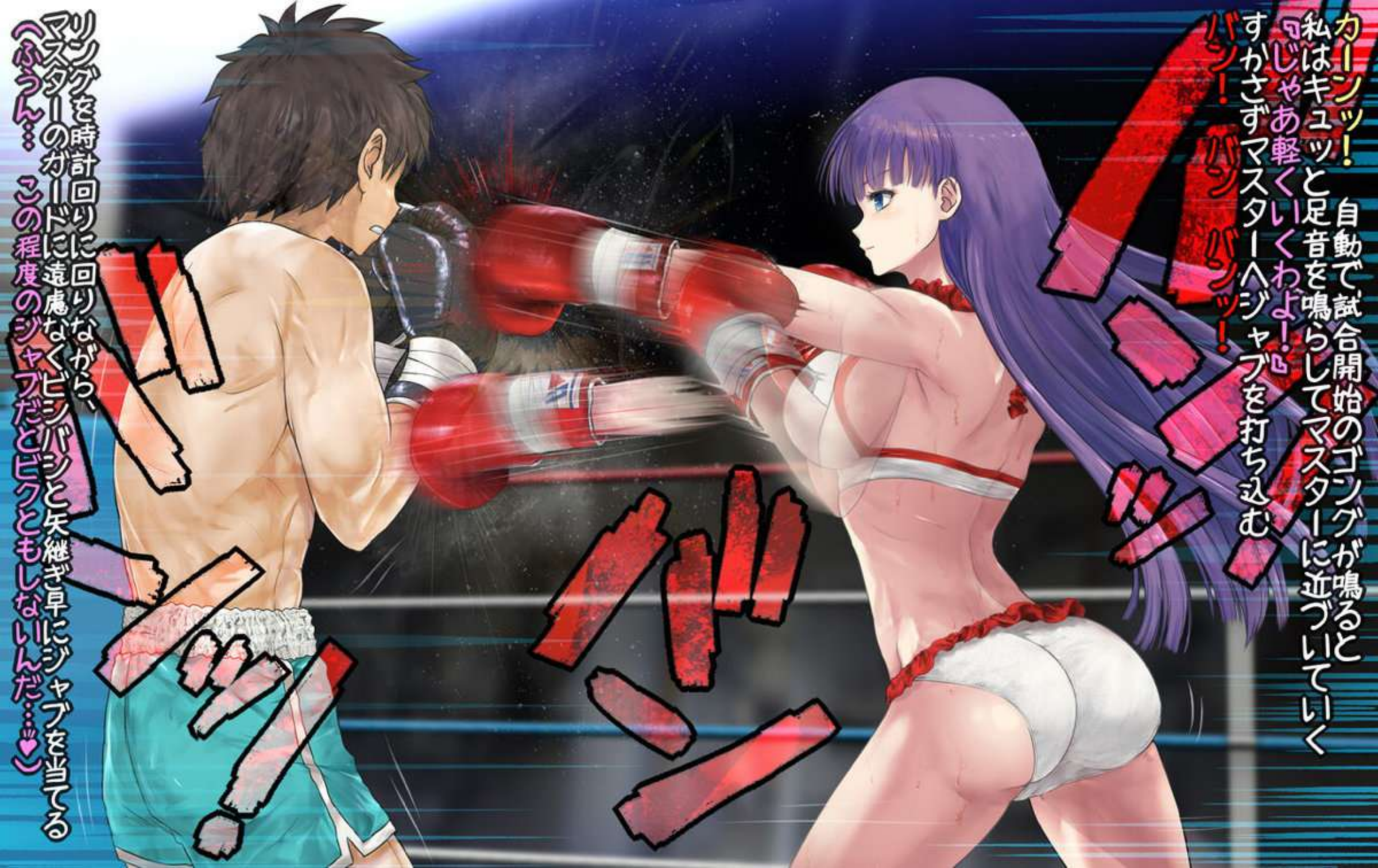
クイ
クイ

クイクイ
マルタさんがかわいらしくファイティングポーズを取って手招きをしてくる
「では、マスターの日々のトレーニングの成果を見てあげましょう♥胸を貸してあげますよ、かかってきてください♥」
「どちらかの足腰が立たなくなるまで…、徹底的にヤり合いましょうね♥」
マルタさんがにっこりと俺に嬉しそうな笑顔を向ける
「優しくしてね…？」
「優しくノックアウトしてあげますよ、マスター♥」

クイ
クイ
私はファイティングポーズを取ってマスターを手招きをした
「では、マスターの日々のトレーニングの成果を見てあげましょう♥胸を貸してあげますよ、かかってきてください♥」
「どちらかの足腰が立たなくなるまで…、徹底的にヤり合いましょうね♥」
「優しくしてね…？」「優しくノックアウトしてあげますよ、マスター♥」
私はにっこりとマスターに嬉しげに笑顔を向ける




カーンッ！
マルタさんがキュッと足音を鳴らして近づいてくる
「じゃあ軽くいくわよ！」
すかさずマルタさんがジャブを打ち込んでくる
バン！バン！バンッ！
自動で試合開始のゴングが鳴ると
リングを時計回りに回りながら、
俺の腕に遠慮なくビシバシと矢継ぎ早にジャブを当ててくる
（さすがマルタさんのパンチ…　ジャブだけで腕が痺れてくる）
バン
バン


カーンッ！
自動で試合開始のゴングが鳴ると
私はキュッと足音を鳴らしてマスターに近づいていく
『じゃあ軽くいくわよ！』
すかさずマスターへジャブを打ち込む
バン！バンッ！バンッ！
リングを時計回りに回りながら、
マスターのガードに遠慮なくビシバシと矢継ぎ早にジャブを当てる
（ふうん…この程度のジャブだとビクともしないんだ…♥）

タン
タンッ
ゆさっ
ゆさっ
キュッ
キュッ

マルタさんの出だしのギアの高さにマルタさんの出だしのギアの高さに思わず弾かれるようにバックステップで距離を取ると意外にもマルタさんは追撃をしてこない息を乱すこともなくスタンとステップを取っている上下のリズミカルなステップの縦揺れに合わせてぱいがふるふると揺れている

タン

タンッ

ゆさっ

ゆさっ

キュッ

キュッ

『ほらっ、打ってこないの？私に強いところを見せてくれるんでしょう？攻めてこないと私に勝つなんてできないわよっ！』

（よぉし、今度はこっちのパンチを見せてやる…！）

私のいきなりの打ち込みにマスターは面食らったようで思わずバックステップで距離を取る
私はあえて追撃をせず、マスターのテンションを高めることにする
まだ息を乱すこともなくタンタンとステップを取ってマスターの様子を見る
上下のリズミカルなステップの縦揺れに合わせるように
私の気持ちも胸も弾んでいる

タン

タンッ

ゆさっ

ゆさっ

キュッ

キュッ

『ほらっ、打ってこないの？
私に強いところを見せてくれるんでしょう？
攻めてこないと私に勝つなんてできないわよっ！』
（楽しませてもらわなくちゃ……♡）

ビッ
ビッ
キュッ
キュッ

ジャブを打ち込んでいくが
マルタさんはスウェーで上体を揺らし
俺のパンチはマルタさんの目前数センチで止まり
完全にパンチを見切られている
ビッ
ビッ
キュッ
キュッ
『大事なのはパンチをただ打つよりも、パンチを当てる事ですよっ！
上下に打ち分けるっ！』
マルタさんは俺にアドバイスを飛ばす余裕を保っている
（ギアをもう一段上げる…！）

マスターはジャブを打ち込んでくるが
私はスウェーで上体を揺らし
私の目前数センチで止まる所で
彼のパンチを見切って止める
ビッ
ビッ
キュッ
キュッ
『大事なのはパンチをただ打つよりも、パンチを当てる事ですよっ！
上下に打ち分けるっ！』
私はマスターにアドバイスを飛ばす余裕を保って彼のパンチを躱す
（マスターのギアが上がってきた…！）

ヒュ
ヒュ
ヒュ
ボヨヨ
ボヨヨ
バシュッ
ボヨ
ボヨ

一歩踏み込んでインファイトを仕掛けていくするとマルタさんはガードを固めて真っ向から俺のパンチを受ける
バン！バンッ！
パンチを受け止めるたびにマルタさんの大きな胸が反動で揺れる
ぷるっ
ぷるっ
ヒュ
ヒュ
ヒュ
バムッ
上下に打ち分ける俺のボディをマルタさんは腹筋で受け止める
バムッ！
（分厚いタイヤを叩いたみたいだ…！）
俺の攻撃をものともせず、じりじりと戦車のように近づいてくる
「くっ…！」

マスターは一歩踏み込んでインファイトを仕掛けてくる
私はガードを固めて真っ向から彼のパンチを受け止める
バン！バンッ！
ガードを叩かれてパンチを受け止めるたびに重心を揺らされる
（なかなかの強いパンチ…！）
ヒュッ
ヒュッ
ぷるっ
ぷるっ
バムッ
マスターは私のアドバイス通りパンチを上下に打ち分け
私のボディを叩いてくるが私は腹筋で受け止める
バムッ！（いいパンチね…！）
マスターの攻撃に揺さぶられず、私はじりじりと近づいていく
「くっ…！」
私はそこでマスターの焦りを感じる

ドゴッ

俺は徐々に間合いを詰めてくるマルタさんにプレッシャーを感じ
思わず大振りの右フックを打つ
『甘いっ！』
そのパンチは完全に見切られ
マルタさんにヘッドスリップで右フックを躱された
（中に入られた…！？）
思わず身体が硬直する
ビュッ

マスターは徐々に間合いを詰めていく私に
プレッシャーを感じたのか
思わず大振りの右フックを打つ
そのパンチを完全に見切って
ヘッドスリップで右フックを躱す
(完璧な間合い……っ♥)
思わず身体が硬直したマスターに一撃を返すべく
踏み込んだ左足の先に力を込める
『甘いっ!』

ドゴッ!
ボコッ

マルタさんは俺のパンチを躱すために外側へ踏み込んだ左足をバネのように使い
そのまま反発する勢いで右足を後ろへ回転させ
俺の方へストレート気味のロングジャブを放つ
「シッ！」
身体の軸をコマのように
回転させたマルタさんの巨乳が
大きく揺れる
シッ！
そんな光景を目端に止める間もなく
マルタさんのグローブが俺が必死にガードを固めるよりも早く
俺の顔面に突き刺さる
グシャ！
ボッ

私はマスターのパンチを躱すために外側へ踏み込んだ左足を
バネのように使い
そのまま反発する勢いで右足を後ろへ回転させ
マスターにストレート気味の
ロングジャブを放つ
シッ！
身体の軸をコマのように
回転させた私の胸が
大きく弾む

シッ！

ぶるん

ゲルッ

ドッ

マスターが私の反撃に必死にガードを固めるよりも早く
私のグローブがマスターの顔面に突き刺さる　グシャー！
（くぅ～～～っ、気持ちいい…っ♥）

ボスッ
ドンッ
ゆらり

マルタさんは俺にパンチを当てた反動を利用し
再びグルンと上半身を回転させて右フックを放つ
俺はマルタさんの息もつかせぬ連続コンビネーションに
全く対応できず
そのままマルタさんの強烈な右フックを顔面に受け入れた
バグンッ！『ぶふっ！』
マルタさんの強烈な一撃に早くも鼻血が吹き飛ぶ
その衝撃の反動でブラからこぼれそうなほど
マルタさんのおっぱいが弾む
視界に星が飛び、頭がくらくらする
〈マルタさんのパンチでいきなり気持ち良くされてしまった…！〉
ゴッ
ゴッ

私はマスターにパンチを当てた反動を利用し
再びグルンと上半身を回転させて右フックを放つ
マスターは私の息もつかせぬ連続コンビネーションに
全く対応できないで
そのまま私の強烈な右フックを顔面に受け入れた
バグンッ！『ぶふっ！』
私の強烈な一撃に早くもマスターの鼻から鼻血が吹き飛ぶ
その衝撃の反動でブラからこぼれそうなほど
私のおっぱいが弾んだ
パンチの余韻に私の心も負けず劣らず心も弾む
（ひゅう……♥ ブチ抜いたあ……♥）
ゴッ
ゆさ

『もう一発ぅ！』
ドボォッ！
ふっ！
マイルタさんのエグいコンビネーションのフィニッシュを飾る渾身のボディブロー
が俺のみぞおちに叩き込まれる
『ウッ！？』
思わず肺から呼吸を絞り出されみっともない声をあげさせられてしまう
完全に呼吸の自由を奪われ、
くの字に折り曲げられた体勢のまま
膝をつき、前のめりにリングに崩れ落ちてしまった。
あまりの苦しさに何も物を考えられない

「もう一発ぅ！」「ふっ！」
ドボォッ！
私の自慢のコンビネーションのフィニッシュを飾る渾身のボディブローをマスターのみぞおちに叩き込む
「ウッ！？」
思わずマスターは肺から呼吸を絞り出されみっともない声をあげてしまった。
そのまま私のパンチで、くの字に折り曲げられた体勢のまま膝をつき、前のめりにリングに崩れ落ちてしまった。
私の目の前で、相手がリングに沈むこの瞬間はたまらない

ワン
ツー
スリー
あはっ♥
うぐぅっ…
うおえっ…
ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる

（息ができない……！）
マルタさんのパンチで思わずリングにくずおれて内臓を潰されたかと思うような苦しみに耐える
「うぐっ……」
（これがマルタさんのパンチ……）
「うぉえっ……」
「まだ始まったばかりですよ？がんばって立ってくださいね♥」
前屈みになって俺の様子をうかがうマルタさん
「うぐっ……すりー！……♥」
「それじゃカウントを入れますよ、わーん、つー、
マルタさんが嬉しそうな声でカウントを数え始める

（ダウン……♥）マスターは私のパンチで思わずリングにくずおれて内臓を潰されたわと思うような声を上げて苦しみに耐えている

『うぐっ……、うぉえっ……』（まだ終わらないですよね……）

『まだ始まったばかりですよ？』（がんばって立ってくださいね♥）ぶる

前屈みになってマスターの様子をうかがう

（そうんうん、まだイけるわね♥）

『それじゃカウントを入れますよ』わーん、つー、すりー……♥

マスターの大丈夫な様子に、まだ試合が続けられると

つい嬉しそうな声でカウントを数え始めてしまう

シックス
セブン
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ…
グッ
グッグッ…

シックス
セブン
『フォー、ファイブ…』マルタさんのカウントが進む
俺は腹の痛みをこらえながらリングに手をついて立ち上がる
『シックス、セブン…。やっぱり立ち上がれましたね♥』
『ハア…、ハア…』マルタさんの目を見ながらファイティングポーズを取る
『まだまだ闘志充分ですね、そういうところが好きですよ、マスター♥』
(何がレベル1のパンチだよ…こんなの男でもそう耐えられないぞ…)
ハア
ハア
グッ
グッグッ…
ハア…
『でも私に敵わないって思ったら、私に令呪使ってもいいんですよ?』
『もっとハンデあげないと私には敵わないんじゃないですか?』
『何言ってるんだよ…、レベル1の女の子のパンチが効くわけないだろ…!』
『ひゅう、さすが私の見込んだマスター♥』
『強がりだとしてもそういうガッツあるところ大好きですよ♥』
マルタさんが再び俺に向かってファイティングポーズを取る

シックス
セブン
『フォー、ファイブ…』私の数えるカウントが進む
マスターは痛みをこらえながらリングに手をついて立ち上がった
『シックス、セブン…。やっぱり立ち上がれましたね♥』
『ハア…、ハア…』マスターが私の目を見ながらファイティングポーズを取る
『まだまだ闘志充分ですね、そういうところが好きですよ、マスター♥』
(その不屈さ…、私のパンチで叩き潰してあげますよ♥)
ハア
ハア
グッ
グッグッ…
ハア…
『でも私に敵わないって思ったら、私に令呪使ってもいいんですよ?』
『何言ってるんだよ…、レベル1の女の子のパンチが効くわけないだろ…!』
『ひゅう、さすが私の見込んだマスター♥』
『強がりだとしてもそういうガッツあるところ大好きですよ♥』
私は再びマスターに向かってファイティングポーズを取る

ギリッ
ギリッ
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ

試合が再開すると息もつかせずマルタさんが攻めてくる
「シッ！シッ！」
とにかくガードを固めてマルタさんのパンチの嵐に耐える
（このまま一気に仕留める気か……！）
「バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！」
マルタさんの左右の連打に
「シッ！シィッ！」
打たれている腕がまるで重い棒のように感じる
（でも必ずこの連打の最後に機会が来るはず……）
マルタさんのラッシュの打ち終わりまで
耐えられた相手はいなかったから……！）

シッ

シッ

バシッ

バシッ

バスッ

試合が再開すると私はマスターに息もつかせず攻めていく
『シッ！シッ！』『バシッ！バシッ！』
とにかくガードを固めて私のパンチの嵐に耐えるマスター
バグッ！バズッ！
（優しくこのまま一気に仕留めてあげますよ…！）
バシッ！バスッ！『シッ！シィッ！』
私の左右の連打に打たれているマスターの腕が
みるみる痣でどす黒くなっていく
（ガマンしたって辛くなるだけですよ。
私のラッシュの打ち終わりまで
耐えられた相手はいないんだから…！）

シッ
シッ
バシッ
バシッ
バスッ

ドン

マルタさんのコンビネーションを締める右ストレートが
目の前に飛び込んでくる
だがマルタさんの踏み込む呼吸に、俺はその気配を読んでいた
マルタさんのグローブが後ろ髪をかすめて焦がしながら
ギリギリでマルタさんの右ストレートをダッキングで躱す
これをまともにガードで受けていたら
両腕のガードごと腕を弾き飛ばされていただろう
すぐ上で決定打のパンチを避けられたマルタさんが息を飲む音が聞こえる
（こっこだ…！）
千載一遇のチャンスをつかむべく俺は左腕に力を込める

（このままガードをこじ開けてとどめを叩き込んであげるっ！）
私のコンビネーションを締める右ストレートを
マスターの両腕に向けて叩き込む
しかしそのパンチは手ごたえを残さず、
私のグローブはマスターの後ろ髪をかすめて焦がし
マスターはギリギリで
私の右ストレートを
ダッキングで躱していた
これをまともにガードで受けさせていたら
両腕のガードごとマスターの腕を弾き飛ばしていただろう
大振りのパンチを避けられて私は思わず息を飲む
（やられる…！）
マスターを仕留めるはずが逆に千載一遇のチャンスを与えてしまった

体勢を崩したマルタさんの顔面に向けて
左フックを打ち込む
グローブに確かな感触を感じながら
俺は思い切り左腕を振り抜いた
バグッ!!!
マルタさんの長い髪がたなびき
汗の光の玉と甘い匂いがあたりに飛び散る

体勢を崩した私の顔面に向けて
マスターの左フックが打ち込まれる
バグッ!!!
マスターの硬い拳の感触を感じながら
私は振り抜かれたパンチに顔を弾き飛ばされる
私の長い髪がたなびき
視界には汗とよだれの光の玉があたりに飛び散る

ボボボボ

続けざまにコンビネーションの右フックをマルタさんの左頬に打ち込む
ボグンッ!!!(マルタさんに教えてもらったコンビネーションだ……!)
体に染みついた動きがよどみなく行われ、
俺の右拳が柔らかいマルタさんのほっぺたに沈み込んでいく
拳にマルタさんの頬骨の感触が伝わり
潰されたマルタさんの唇から再びよだれの玉がしぶく

続けざまにコンビネーションの右フックが私の左頬に打ち込まれる
ボグンッ!!!
(これ…私が教えてあげたコンビネーションじゃない…!)
マスターの体に染みついた動きがよどみなく行われ、
彼の右拳が私のほっぺたに沈み込んでいく
頬骨にマスターの拳の感触が伝わり
潰された私の唇から再びよだれの玉がしぶく

うぐ……っ
ぶはっ

（俺はいつだって強いマルタさんを見てきた…！）
「マルタさんの打ってきたコンビネーションはちゃんと知ってる…！妻さも威力も、どの角度、どのタイミングで打つのかも…！」
（と言ってもマルタさんがパワーダウンしてなかったら本当は俺にはどうすることもできないのだけれど…）
うぐ…っ
ぷはっ
「うぐっ…」マルタさんの顔からグローブを引き抜くとマルタさんが苦悶の表情を覗かせる
（ずるい…、マスターがいつもそんなふうにちゃんと私の事見てくれたなんて言われたら…、嬉しくてゾクゾクしちゃうじゃない…っ♥）
俺のパンチにマルタさんが身体ごと後ろにグラつく
「でも今は…、マルタさんに届く…！　俺のパンチが届く…！だから力の差を理解したその上で…俺はマルタさんに勝ちたい…！」
（もう一発…！）
俺はそのままマルタさんに教えてもらったコンビネーションの締めを打ち込むべく、半歩踏み込んで体重を再び右拳に乗せる

（くうっ…、効いたぁ…！）

『マルタさんの打ってきたコンビネーションはちゃんと知ってる…！凄さも威力も、どの角度、どのタイミングで打つのかも…！』

（えっ…、私の動きが読まれていた…？）

うぐ…っ

ぶはっ

『うぐっ…』

私の顔面からマスターのグローブを引き抜かれると思わず声が出てしまう

（ずるい…、マスターがいつもそんなふうにちゃんと私の事見ててくれたなんて言われたら…、嬉しくてゾクゾクしちゃうじゃない…っ♥）

マスターのパンチに私は身体ごと後ろにグラついて半歩後退する

『でも今は…、マルタさんに届く…！　俺のパンチが届く…！だからカの差を理解したその上で…俺はマルタさんに勝ちたい…！』

（もう一発来る…っ！）

マスターはそのまま私が教えてあげたコンビネーションの締めを打ち込むべく、半歩踏み込んで体重を再び右拳に乗せる

バシッ
ボコッ
ボコッ
ボコ

俺は半歩踏み込んだ渾身の右ストレートを
ダメ押しにマルタさんに叩き込む
グシャッ!!
反響した重い打撃音がリングに響く
ぶぐっ!?
ブシュッ
ブルンッ
「ぶぐっ!?」
それは出所を異にする、二重に重なった打撃音だった
右ストレートを振り切ると同時に俺の右頬に熱く重たいものが突き刺さる。
俺の右ストレートを貰いながらも
俺のコンビネーションの締めを読んでいたマルタさんが
左ストレートを打ち返してきていたのだ。
「自分が教えたパンチで…やられるわけにはいかないっての…っ!」
お互いの汗とよだれが花火のようにリング上に飛び散る

マスターはよろけた私に半歩踏み込んだ渾身の右ストレートをダメ押しに打ち込んでくる
グシャッ！
反響した重い打撃音がリングに響く
ぶぐっ!?
ブシャッ
ぶぐっ!?
それは出所を異にする、二重に重なった打撃音だった。
マスターのコンビネーションの締めを読んでいた私は
私の左頬にマスターの右ストレートが打ち込まれると同時に
私はマスターに左ストレートを打ち返していたのだ。
自分が教えたパンチで…やられるわけにはいかないっての…っ！
お互いの汗とよだれが花火のようにリング上に飛び散る

ぐぅ……
ゴロッ
ぐぅ……
グラッ

ぶぷっ…
うぐっ…
お互いにお互いのパンチを味わい、両者ともに体勢を崩してわずかに距離が開く
（効いた…、マルタさんのカウンターパンチ…でも俺のパンチもマルタさんに効いているはず…！）
俺は一刻も早く傾いた身体を立て直そうとする
ぶぷっ…
ゲラッ
うぐっ…
ヨロッ

ぶぷっ…
うぐっ…
お互いにお互いのパンチを味わい、両者ともに体勢を崩してわずかに距離が開く
ぶぷっ…
グラッ
うぐっ…
ヨロッ
（やるじゃない、マスター…さすがに連続で貰ったからちょっと効いた…っ）
私は傾いた身体をすぐさま立て直す

ドッ
ズッ
ガゴンッ!!
マルタさんが俺より一瞬早く体勢を立て直しながらの左アッパーを繰り出す。
「このっ!」
ぐらついた身体を立て直せないままの俺は甘んじてマルタさんのパンチを受けるしかなかった。
「く…、おっ…」
強烈な左アッパーにアゴ先を天井に向けて吹き飛ばされる
(マズイ、完全に脳を揺らされた…!)
足元がチ鳥足になりダウンを免れそうにない

ズバッ
ドン!!
私はマスターより一瞬早く
体勢を立て直しながらの左アッパーを繰り出した。
「このっ！」
ぐらついた身体を立て直せないままのマスターは
甘んじて私のパンチを受け入れるしかなかった
ガゴンッ!!
「く……、おっ……」
私の強烈な左アッパーにマスターは
アゴ先を天井に向けて吹き飛ばされる
（完璧な手ごたえ……！　意識の糸、いただきっ♥）
マスターは足元が千鳥足になり
ダウンを免れられないだろう

はあ、
はあ
ぷー！
ぷー！
ぐにゅる
ズリュッ
にゅる
はあ
はあ
ムニュッ
ムニュッ
グッ
ギュッ

はあ
はあ
はあ
ぷー
ぷー
ぷー

（ダウンね…♥）
私の強烈なアッパーカットにマスターは脳を揺さぶられ膝が落ちていく。だが必死に一歩踏み出してダウンを拒みそして私にクリンチをしてダウンを免れた
（しぶといのね、マスター…♥）

お互いが荒い息をつきながらも私は私はマスターをそのままコーナーに押し込んでいく
（逃げ場のない所で料理してあげる♥）
私とマスターの胸が密着し、押し込むたびにむにむにと私のおっぱいが形を歪める。私はそうしているうちにマスターの股間が膨張し私の股座へと押し付けられるのを感じていた

ぴく
ぴく
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ

「もう…、ダメじゃないですかマスター…♥」
「こんなに硬くなってちゃ、私とボクシングなんてできませんよ…？」
俺を抱きしめながら優しく耳元でささやくマルタさん
だが俺のペニスはもうマルタさんの感触に耐えられず
がっちがちにフル勃起してしまっていた
「こんなにおっきくしちゃって…、試合中なのにダメなマスターさん♥」
マルタさんが俺をコーナーポストに押し付けてから少し身を離すと
マルタさんのグローブが俺のペニスの先っちょを包み込んでぐりぐりと刺激する
「あっ…♥　ああっ…♥」
思わず身を固くするほどの快感が背筋を走る
「私でそんなに興奮してくれるのは嬉しいですけど…仕方ないわよねえ…
…少し荒っぽくしますよ♥」
マルタさんがグローブをギュッと握り込む音が聞こえた
あっ
ビク
ぐり
ぐり
ぐりぐり
ふり
ふり

マスターのおちんちんは目を見紛うほど巨大でがっちがちに勃起してしまっていた
『こんなにおっきくしちゃって…、試合中なのにダメなマスターさん♥』
私はマスターをコーナーポストに押し付けてから少し身を離すと
グローブでマスターのおちんちんの先っちょを包み込んでぐりぐりと刺激する
(クリンチでブレイクされないから
なかなか離れられなくて…
『あっ…♥あぁっ…♥』
私までちょっと濡れてきちゃった…♥)
『私でそんなに興奮してくれるのは嬉しいですけど…仕方ないわよねえ…
…少し荒っぽくしますよ♥』
思わずマスターが快感がで身を固くする
私はマスターのおちんちんをいたずらしたグローブを腰だめにして
グローブを固く握り締めた
『もう…、ダメじゃないですかマスター…♥』
『こんなに硬くなっちゃ
私とボクシングなんてできませんよ…?』
マスターを抱きしめながら優しく耳元でささやく
あっ
ビク
ぐり
ぐり
ふり
ふり
ふり
ギュッ

ボッ
ボッ
ボッ

ガッ
ゴオンッ！
『ふっ！』
ガッ
ッパ
ーカ
離れ
衝撃が突き抜ける。
マルタ
俺の顎を貫通し
ットが
突き立った。
そのまさ！
足裏天ん
脳天
俺の
同時
にに
目の
前がが
が落
真ちゃ
ったグ
暗よか
にうら
になった

ガッ
ゴオオンッ!!
ふっ!
私のパンチが
そのままアッパーカットがマスターの顎を吹き飛ばし
マスターの天井に向かって発射されると
小さくジャンプするとリングから引き離され
そのまま足のウラがピットに突き立った。
リングに尻もちをつくように崩れ落ちた

ぼとっ、ころころという音を立てて
さっき口の中からアッパーカットで
吹き飛ばされたマウスピースがリングに落ちてきて
マルタさんの足元にみじめに転がった。
『どうですか？　これで上半身と下半身が分断されて
下半身が落ち着いたでしょう？』
俺の亀頭を揉みもみして刺激を与え、
快感をもたらしたマルタさんのグローブは
そのまま次の瞬間に俺のアゴに激痛をもたらしていた…。
『ではカウントを入れますから
その間に立ち上がってくださいね、マスター♥』
わーん、つー、すりー！…』
このアッパーカットは
二連続で貰ってはいけないパンチだった…！
膝が完全に笑って立ち上がることができない…。

ぼとっ、ころころという音を立てて
マスターの口の中から私のアッパーカットで
発射されたマウスピースがリングに落ちてきて
私の足元にみじめに転がった。
『どうですか？　これで上半身と下半身が分断されて
下半身が落ち着いたでしょう？』
彼のいきり立った男根を
弄んだグローブで、私はそのまま次の瞬間に
彼のアゴに激痛という罰を与えたのだ。
『ではカウントを入れますから
その間に立ち上がってくださいね、マスター♥』
わーん、つー、すりー…。
このアッパーカットが効きすぎたのか
マスターは膝が完全に笑って
立ち上がることができないでいる…。

すりーふぉー
ふぉーいぶ
しーっくす

すりーふぉー
『このまま負けちゃうんですか？
私に勝ってSEXするつもりであんなに大きくしてんじゃないんですか？
そのまま『がっかりですよ？』
カウントアウトしちゃったらが目の前のマルタさんがぼやけて見える。
自分の不甲斐なさに、悔しさで泣きたくなってきた…
『しゃんとして！
私を抱きたかったら、立ち上がってかかってきなさい！』
倒すべき相手であるマルタさんに目の前で一喝されてしまった…
『ふぉー、ふぁーいぶ、しーくす…』
立ち上がるマルタさんが弾む声で
両足をつけて踏ん張るが
ブーツのつま先で見下ろすマルタさんの足元で
ものにウンウンと足に力を込め、
ルーカをするうとダウンする俺は
ふらふらとして立ちあがることができない…

すりーふぉー
『このまま負けちゃうんですか？私に勝ってSEXするつもりですか？あんなに大きくしてたんじゃないんですか？そのままカウントアウトしちゃったらがっかりですよ？』
どうしようもなく悔しそうな顔を私に見せるマスター…
『しゃんとして！私を抱きたかったら、立ち上がってかかってきなさい！』
捨てられた子犬のような顔をするものだからマスターを思わず目の前で一喝してしまった…
『ふぉー、ふぁーいぶ、
（正直下がってくるとはしなかったな…）
（スターに、立ち上がろうと足に力を込めるものの、
両足をリングにつけて踏ん張るものの、
両目前で立ち上がることができないマスター…。
私のはずたてほしくないな…。
私はクロスカウンターを入れてしまう。
強い食…ふぁーいぶ、
（ふぉー、
もっとだにに目を見てこっちを向いてマスターと殴り愛したい…♥）

ふーっ
ふーっ
ぷる
ぷる
ぷる
ぷる

「せぶーん、えーいと…
「う……、うううっ……」泣きそうな声を上げながら
コーナーマットに背をつけて、ずり上がるような形で
みっともないながらもなんとか立ち上がる
「ないーん……、いいでしょう
本当ならこのままテン、ノックアウト♥、っていうところですけど
ちゃんと立ち上がってきたんでまだ試合続行してあげますよ」
おまけでマルをもらった気分になるがいまだ足元はおぼつかない…。
「でもこのままじゃ膝を差し入れてないと
またダウンしちゃいますね？
このラウンドでもう一回ダウンしちゃったら、
今度こそTKOでマスターの負けになっちゃいますよ
それならこのまま私の膝の上で休んでいたい？」
ギュッ
ふーっ
ふーっ
ぷる
ブル
ぷる
実際マルタさんが俺の股に膝を差し入れてなかったら
いつ倒れこんでしまうかわからないような状態だ。
それでもマルタさんにボコボコの顔を覗き込まれて、いーやいーやと頭を振る
「ふっ…マスターのグロッキーな顔、目の前でガン見…♥」
このままじゃレベル1の女の子にボクシングで負けちゃいますよ？
反撃…しなくちゃいけないでしょう？　ほら、腕を上げて…♥
私をノックアウトしてください、マスター♥」

『せぶーん、えーいと…
う……、うううっ……』マスターが泣きそうな声を上げながら
コーナーマットに背をつけて、ずり上がるような形で
みっともないながらもなんとか立ち上がる
『ないーん……、いいでしょう
本当ならこのままテン、ノックアウト♥、っていうところですけど
ちゃんと立ち上がってきたんでまだ試合続行してあげますよ』
マスターの股座に膝を差し入れて
今にも崩れ落ちてしまいそうなマスターの顔を覗き込む…。
『でもこのままじゃ膝を差し入れてないと
またダウンしちゃいますね？
このラウンドでもう一回ダウンしちゃったら、
今度こそTKOでマスターの負けになっちゃいますよ
それならこのまま私の膝の上で休んでいたい？』
ふーっ
ふーっ
ぶる
ブル
ぶる
（こんなこと言われちゃったら悔しくて仕方ないですよね？）
私にボコボコの顔を覗き込まれて、マスターはいやいやと頭を振る
『ふふっ…マスターのグロッキーな顔、目の前でガン見…♥
このままじゃレベル1の女の子にボクシングで負けちゃいますよ？
反撃…しなくちゃいけないでしょう？ほら、腕を上げて…♥
私をノックアウトしてください、マスター♥』
（マスターにノックアウトされるのも、マスターをノックアウトするのも
本音はどちらも捨てがたい♥）
ギュッ

ドスッ
んんっ
んっ
ぶっ
ぶっ
バシッ

「ここまで私のパンチに耐えられるなんて思いませんでしたよ」
（そうだ…ここまであのマルタさんのパンチを食らってまだ立っていられるじゃないか…！）
今までマルタさんに俺のパンチの効き目が薄かったのはマルタさんの強打にビビって無意識に腰が引けていたからだ。
ここまで一方的にボコボコにされてようやく腹が据わった
（マルタさんと真正面から殴り合って…勝つ…！）
再びマルタさんにパンチを打ち込む胆力が心の奥底から湧き上がってくる
ひとつ…、ぺちっとマルタさんにボディを返す
「んっ♥」（よし、指も腕も動く）
ふたつ…、ぼすっ！（足先もふくらはぎも動く）
「んんっ♥」
ふーっ
ふーっ
んっ
んんっ
ゆさっ
ゆさっ
みっつ…、バスッ！
「ダメですよ、こんな弱々しいボディじゃあ…」（肩も太腿も動く）
よっつ…、ドスッ（腰も、握力も力が戻ってくる…）
「残念ですけど、ここまでかな？じゃあトドメ♥」
ぎちっ…！！とグローブが握りしめられる音が聞こえる
刺しちゃいますね、マスター♥」
だがそれはマルタさんのグローブだけでなく
俺のグローブからも同じ音がした

『ここまで私のパンチに耐えられるなんて思いませんでしたよ』
（まあマスターもこんなにがんばったんだから
最後に気持ちよくK○してあげて、ごほうびあげてもいいかな♥）
ここまで私にボコボコにされてマスターはまだやる気があるようだ
（マスターのこういうところが好きなのよね…♥）
股に挟ませていた私の太ももを引き抜いてもしっかり立っている
すると…、ぺちっとマスターは私にボディを返す
『んっ♥』（必死な顔…♥）
ぼすっ！（子供のパンチみたい♥）
『んんっ♥』
ふーっ
ふーっ
ゆさっ
ゆさっ
んっ
んっ
バスッ！（う～ん…）
『ダメですよ、こんな弱々しいボディじゃあ…』
ドスッ（これはボクシングないんだから♥）
『残念ですけど、ここまでかな？』
じゃあトドメ♥
刺しちゃいますね、マスター♥
ぎちっ…！！とグローブが握りしめられる音が聞こえる
だがそれは私のグローブだけでなく
マスターのグローブからも同じ音がしていた

ぶっ!?
ぶっ!?
ぶっ!?
ぶっ!?

『フンッ……!』
『ドボォッ!!』
『ぶふっ!?』
裂帛の気合と共に体重を乗せ
左ボディをアッパー気味にマルタさんに打ち込む
俺のグローブがマルタさんの腹筋を突き破って
内臓まで届いた感触とぐちゅっとした水音
マルタさんは思わず目を見開いて前のめりになり
お尻をびくっと震わす
ぶふっ!?
ぶちゅっ
ぶちゅっ
ボキ

『フンッ……！』
『ドボォッ！！』
『ぶふっ！？』
マスターが裂帛の気合と共に体重を乗せ
左ボディをアッパー気味に私のお腹に撃ち込んだ
彼のグローブが私の腹筋を突き破って
内臓まで届いた感触とぐちゅっとした水音…
マスターのボディアッパーの衝撃が
みぞおちから背骨を抜けて背後まで突き抜けて行った
私は思わず目を見開いて前のめりになり
お尻をびくっと震わす
ぶふっ！？
ぶちゅっ
ぶちゅっ

プル
ぐぷっ…！
ぎりッ!!
ポタ
ポタ
ドクッ
プル

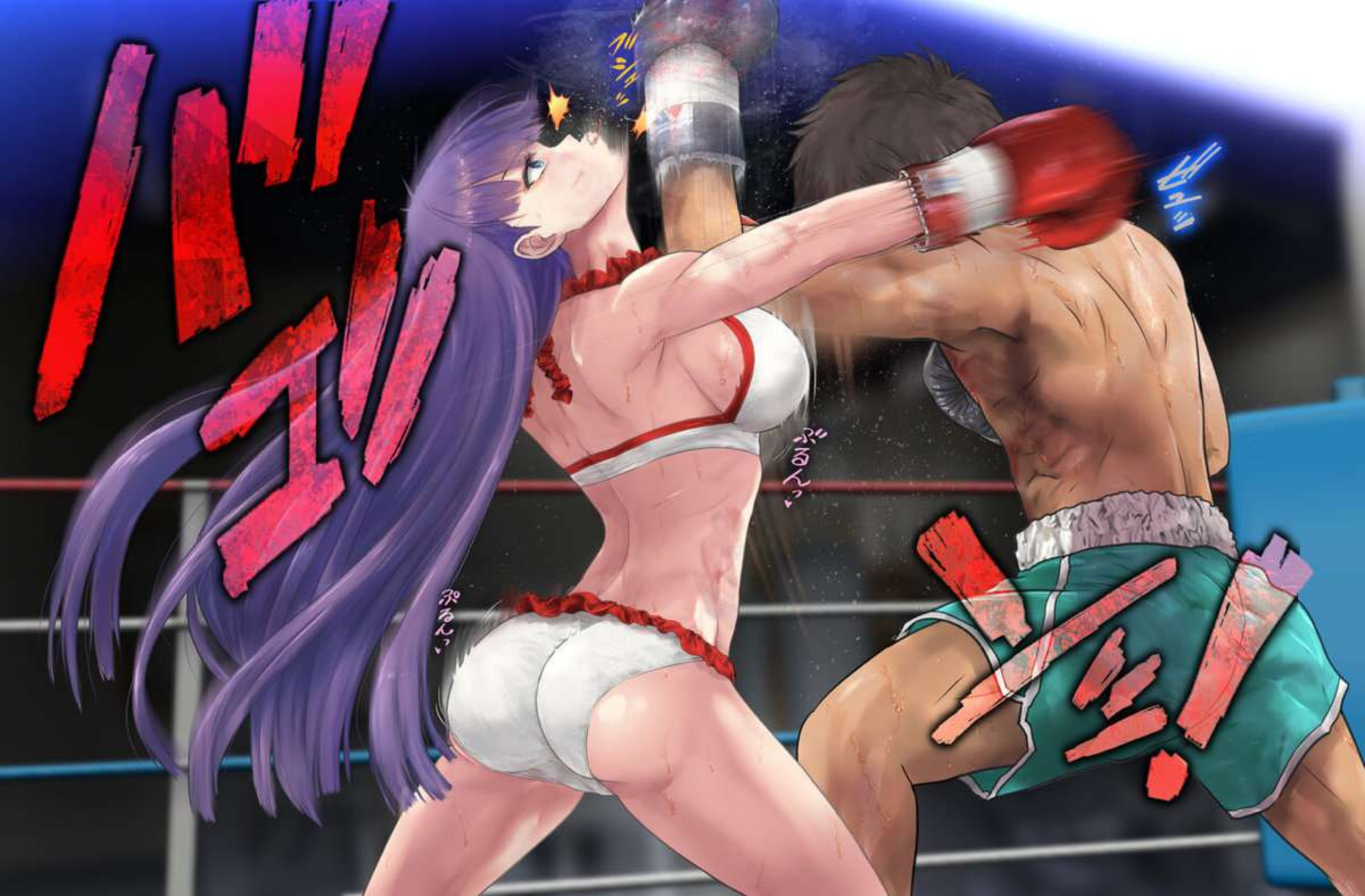
俺の拳をお腹の奥まで突き入れられて
マルタさんの身体が硬直する
マルタさんの口元から押し出された液体がリングへとぽたぽたと落ちてい
(なんだ…やっぱり届く…。俺のパンチはマルタさんにちゃんと届いてる…!)
マルタさんに押し込んだグローブにカがこもる
ぐぷっ…!
ぐぷっ…!
ぐりっ!!
ポタ
ポタ
プル
プル
どクッ

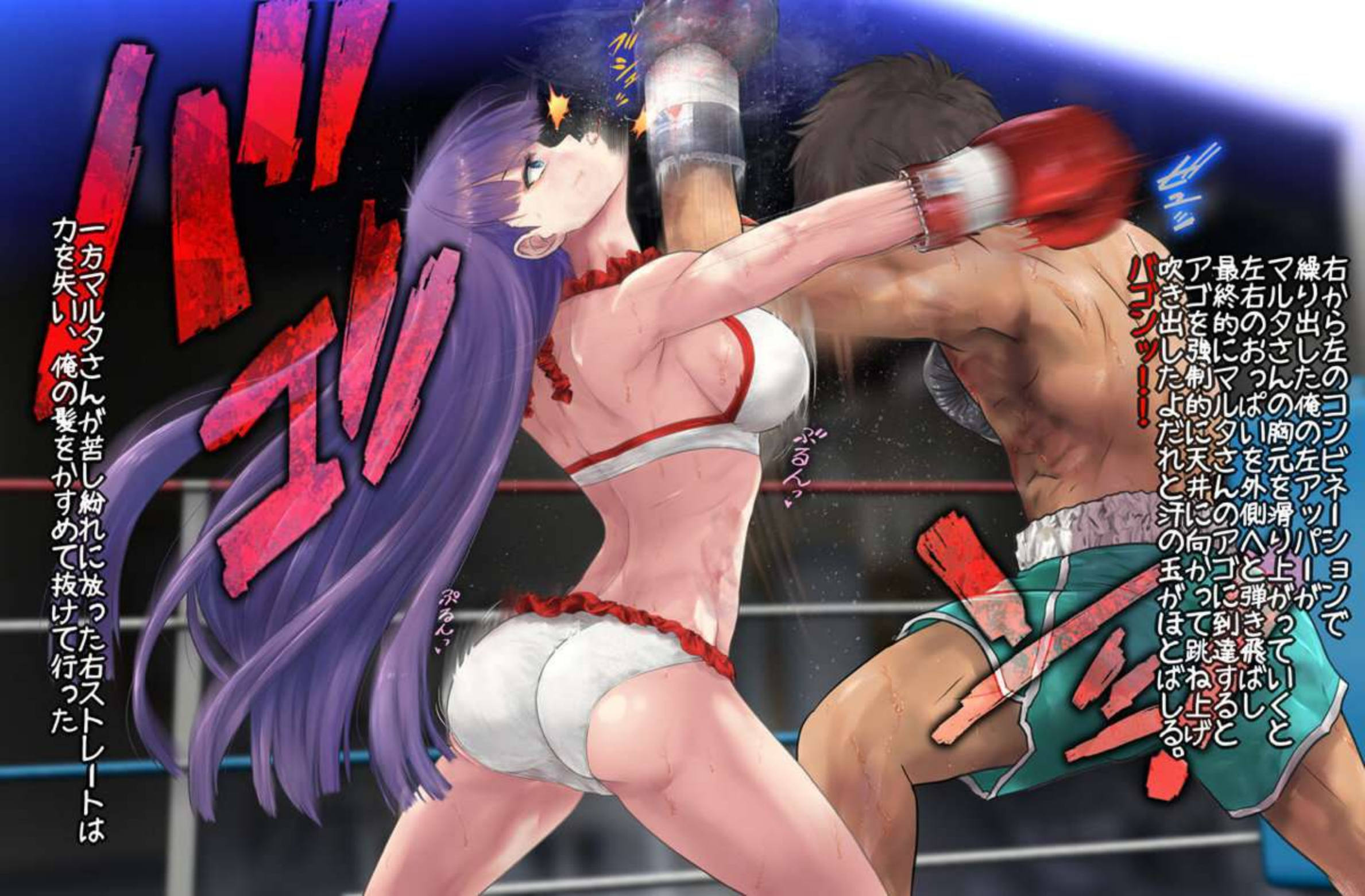
私はマスターの拳をお腹の奥まで突き入れられて
身体を硬直させられてしまう
ぐぷっ…！
私の口元から押し出された液体がリングへとぽたぽたと落ちていく
（何…？マスターにまだこんなパンチを打つ気力があったの…！？）
私にぐりぐりと押し込まれたグローブに力がこもる
ぐぷっ…！
ぐりぐりっ！
ポタ
ポタ
プル
プル
ビクッ

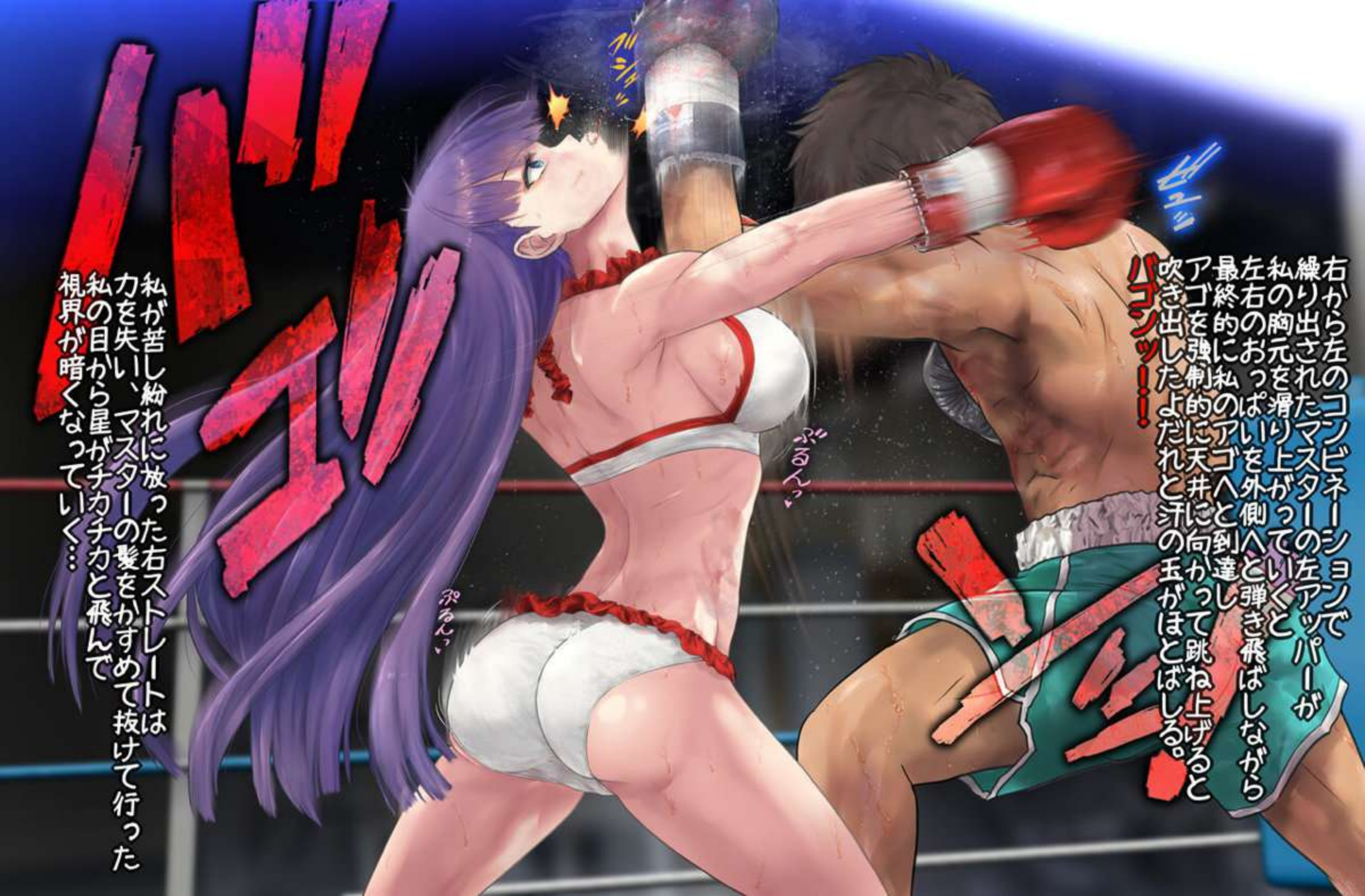
ばばばっ!?
ぶるんっ♡

ぶるんっ♡
ぶぐぉっ!?
ぶぐぉっ!?
ふっ!
バグンッ!!
ぶぐぉっ!?
俺のパンチをお腹に埋めたまま反撃の気配を見せるマルタさん。だがそのまま右フックを俺は流れを奪わせずそのまま放つマルタさんの顔めがけて
マルタさんの右拳が動く、俺だがボディの入れ替わりに打ち込んだ俺の右フックがマルタさんの顔を左側へ弾き飛ばした
汗マグローブの革が弾ける音と共にいいマルタさんの長い髪が扇状に広がり、いの玉に混じってマルタさんの髪の香りがあたりに撒き散らした

ぶぐぉっ!?
ぶるんっ
私はせりあがってくる嘔吐感をマウスピースと共に無理矢理体内へ押し戻して反撃のパンチを打ち返そうとする
(このくらいでケツ捲ってなんかいられないでしょ…っ!)
私は右拳をマスターの顔面に返そうと腕を振るっただがマスターの左ボディの入れ替わりにマスターの右フックが私のパンチより早く私の顔を右側へ弾き飛ばした
バグンッ!!
『ぶぐぉっ!?』
グローブの革が弾ける音と共に私の長い髪が扇状に広がり、汗の玉とボディで口中に溜まったよだれをリングへと吹き飛ばす


ぷるんっ
ぷるんっ


ボゴッ
ブシュッ
ぶるんっ
ぷるんっ
ボゴッ!!!
右から左のコンビネーションで繰り出したのパンチが
マルタさんの俺の左アッパーが
左右の胸の元を滑り
最終的におさいを外側へ
アゴを強制的にマルタさんの向かって
吹き出した天井にアゴと上に
よだれと汗の玉がほとばしる。
ぶっ飛ばされ
一方マルタさんが苦しし紛れに放った右ストレートは
力を失い、俺の髪をかすめて抜けて行った


右から左のコンビネーションで繰り出されたマスターの左アッパーが私の胸元を滑り上がっていくと左右のおっぱいを外側へと弾き飛ばしながら最終的に私のアゴへと到達しアゴを強制的に天井に向かって跳ね上げると吹き出したよだれと汗の玉がほとばしる。
バゴッッ!!!
ぶるんっ
ぶるんっ
私が苦し紛れに放った右ストレートは力を失い、マスターの髪をかすめて抜けて行った
私の目から星がチカチカと飛んで視界が暗くなっていく…

ゴゴ
ドリュ
ゴゴ
ゴゴ
ゴゴ
ドリュ
ゴゴ
ゴゴ
ゴゴ
ゴゴ

ロそマ ガア俺のアッパーでのりあしごのをカチ上げられたマルタさんの
あぐ…っ…♡ ボードがだらりと落ち、膝がガクガクと笑う
マルタさんがぐらりと前のめりになると
そのまま力なくマウスピースを口の中からリングへと落した

ガード
ガク
ガク
あぐ…っ…
ばらん
だらん
マスターのアッパーで
アゴをカチ上げられた私のガードは
だらりと落ち、膝がガクガクと笑う
あぐ…っ…
私の身体がぐらりと前のめりになると
そのままカなくマウスピースを
口の中からリングへと落した

ワンッ!
ハッ!
ハッ!
フォー!
うう…
んぐぅ…

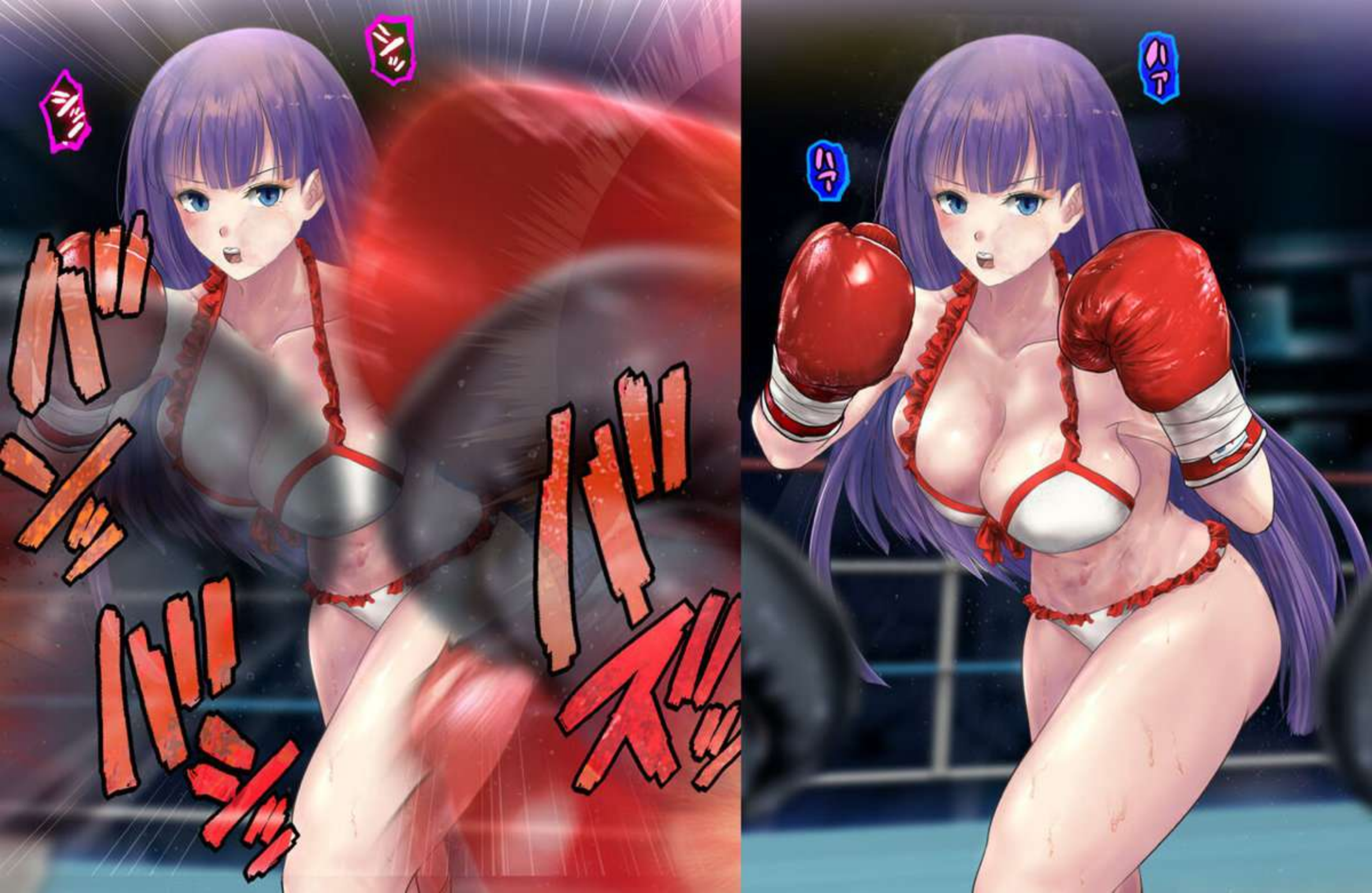
ズズゥ…ン
リングに振動を残しながら
マルタさんの身体がつつぶせにマットに落ちる
絶対不沈の無敵の戦艦の様だったマルタさんが、
ついに俺のパンチでリングに沈んだ…。
うう…
ワンッ!
ツーッ!
マルタさんのマウスピースと
長い髪がリングの上に散らばり
凄惨なダウンの様子を現わしている
「カウント…」
「カウント入れなきゃ…」
自分に信じ聞かせるように
マルタさんの目の前で
呆然としてしまっていた俺は
「カウントを入れ始める
「ワンッ!」
「ツーッ!」
「フォーッ!」
「スリーッ!」
うつ伏せのおっぱいを
リングに潰されながらマルタさんがうめき声を上げる
「うう…」
「んうう…っ…」
(虚ろな目がえっちだ…)
んうう…

ズズゥ…ン
リングに振動を残しながら私の身体がうつぶせにマットに落ちた。
とうとうマスターのパンチに耐えられず、
私はキャンバスを舐めさせられたのだ…。
うう…
ワンッ!
ツーッ!
私のマウスピースと長い髪がリング上に散らばり
凄惨なダウンの様子を現わしている
「カウント…、カウント入れなきゃ…」
私の目の前で呆然としてしまっていたマスターは
自分に言い聞かせるように
カウントを入れ始める
「ワンッ!、ツーッ!、スリーッ!、フォーッ!……」
うつ伏せのおっぱいをリングに潰されながら私はうめき声を上げる
「うぅ…、んうぅ…っ…」(リング…、冷たい…)
私はほっぺたに当たる冷たい感触で意識を取り戻した
んうぅ…

はーっ
はーっ

「ファイブ！、シックス！……」
そこまでカウントを数えるとマルタさんが腕をついて体を起こす
「はーっ、はーっ、はーっ……、つくづく……、効いたあ……」
マルタさんが俺のアッパーに打ち抜かれた顎をさすりながら俺を見上げる
「セブン！……」
は――っ
は――っ
「はい、そこまでよ。今度は私がマスターをぶっ飛ばしてやるから」
そう言うとマルタさんはマウスピースを拾ってすくっと立ち上がり
マウスピースをはめながら俺に向かってファイティングポーズを取った
（くそ……、今のパンチが効いてないのか……？）

「ファイブ！、シックス！……」
そこまでカウントを数えられると私は腕をついて体を起こした
「はーっ、はーっ、はーっ……、くっ、効いたあ……」
私はマスターのアッパーに打ち抜かれた顎をさすりながら彼を見上げる
（やばっ、ちょっと意識飛んだ……。思ったよりやるわね、マスター……）
「セブン！……」
カウントがここまで進んでいるとは思わなかった
は――っ
は――っ
「はい、そこまでよ。今度は私がマスターをぶっ飛ばしてやるから」
そう言うと私はマウスピースを拾って、あえてすくっと立ち上がり
マウスピースをはめながらマスターに向かってファイティングポーズを取った
（マスターのパンチが効いてるって悟られないように……）
ふらつきそうな足元に喝を入れて私は拳を構える


ハァ
ハァ

ハァ…、ハァ…
立ち上がったマルタさんがじりじりと近づいてくる
ダウンを奪ったとは言えマルタさんのパンチで
追い込まれたのはこちらも同じで、
お互いベタ足で射程内に入る
ハァ
ハァ
シッ！シッ！
マルタさんがためらわずジャブを放ってくる
俺はガードを固めて
お互いのグローブがぶつかり合う感触越しに
マルタさんのパンチ力を確かめる
（まだ力が衰えてない…）
シッ
シッ
バシッ
バシッ
バシッ

ハァ…、ハァ…
立ち上がった私はじりじりとマスターに近づく
ダウンを奪われたとは言え私のパンチで
マスターもかなり追い込まれているのは間違いない
お互いともにベタ足で射程内に入る
ハァ
ハァ
シッ！シッ！
私はためらわずマスターにジャブを放つ
マスターはガードを固めて
私の様子をうかがっているようだ
（回復するまで、
効いてるって悟られるわけには…っ）
シッ
シッ
バシッ
バシッ
バシッ

バン
ハァ
ゆさ
ハァ
ゆさ
ハァ
ゲッ

シッ！
バシッ！
ハァ…、シッ！
ハァ…
バシッ！
バグッ！
マルタさんはジャブを打ち続けて
俺のガードを激しく叩いてくるものの
連打に息継ぎが混ざる。
（マルタさんのスタミナが切れてきているんだ……！）
俺は逆にガードを固めて下がりながら息を整える
バン
シッ！
ハァ
ゆさ
ハァ
ゆさ
シッ
バシッ
バシッ
バグッ

シッ！シッ！シッ！ハァ…、シッ！ハァ…。
バシッ！バシッ！バグッ！
私はジャブを打ち続けてマスターのガードを激しく叩いて追い詰めていくものの連打に息継ぎが混ざる。
（スタミナが切れてきてる…！それでもマスターをロープに追い詰めるまでは…）
そう思いながらパンチを繰り出しながら前へと進み続ける
バン
バン
バン
バン
バン
バグッ
シッ
ハァ
ゆさ
ハァ
ゆさ
シッ

うぁっ！
ふァ！

マルタさんの連打の繋ぎのタイミングに合わせて俺は的確に反撃を試みた

「ふっ！」

まっすぐにマルタさんのみぞおちを貫くはずが俺の右ボディストレートがマルタさんが距離を詰めてきていた結果、拳はマルタさんの胸元に沈んでいくグローブ越しにさえ伝わるボニュンっとしたやわやわな重量感のある感触…

ふっ！

うあっ！

ぼるんっ

そののちマルタさんの胴体にパンチが到達しバムンッ！という音を立ててマルタさんの胸が左右に大きく弾かれて揺れる

「うあっ！」

マルタさんがたじろいで息が詰まった可愛い悲鳴を上げた

私の連打の繋ぎのタイミングに合わせてマスターは的確に反撃を挟んできた。

（しまった…！）

「ふっ！」

マスターの右ボディストレートが

ふっ！

まっすぐに伸びてくる。

私が距離を詰めていった結果、マスターの拳は私の胸元に沈んでいく。

踏み込んでカウンター気味におっぱいを左右にえぐり潰しながら私の胸の中に入ってくるマスターの腕…

うあっ！

ぶるんっ

そののち私の胴体にまでパンチが到達し「バムンッ！」という音を立てて私の胸が左右に大きく弾かれて揺れる。

「うあっ！」

私は思わずたじろいで息が詰まった可愛い悲鳴を上げた

ボコボキッ!!
ぶっ!

ふっ！
思いがけない感触に、一瞬俺は動きを止めてしまった
ふっ！
ボコオッ!!!
うぐっ!?
予想外の着弾地点に一瞬たじろいだ俺は
まともにマルタさんの反撃のボディアッパーを
逆にみぞおちに受け入れてしまった
ガハッ!!
息が詰まり、俺はマウスピースの隙間から
よだれを吹き出させられてしまう

私にパンチを打ち込んだはずのマスターは、
何故か一瞬動きを止めてしまった
「ふっ！」
「ボゴオッ！！」
「うぐっ！？」
すぐさま立て直した私は今度はマスターに
反撃のボディアッパーを
逆にみぞおちに叩き込んだ
ふっ！
ガハッ!!
マスターは私のパンチで息が詰まり、
マウスピースの隙間から
よだれを吹き出してしまう

はぁ
ハァッ
ハァ
ハァ
プル
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ

マルタさんの強烈なボディブローに
俺は上半身を突き出したまま
ゾンビのように前に歩みを進めそのままマルタさんの
豊かなおっぱいに顔を預ける形になってしまった
〈吊り下げた肉塊をユッケにするボディブロー…
もっちゃいけないパンチをもらってしまった…〉
必死にクリンチの形でマルタさんの身体にしがみつく

ハア

ぷにゃ

ぷる

ぐにっ

はぁ

ハア

はぁっ

ボコボコにされた俺の顔面を癒す
せっかくの天国の柔らかな感触にも、
苦しさが先だって味わう暇なんかなかった。
『んっ……マスター……♥』
マルタさんの火照った艶っぽい声が耳元で響く

プル

マスターは私の強烈なボディブローに屈して上半身を突き出したまま
ゾンビのように前に歩みを進めると
そのまま私のおっぱいの間に軟着陸して
顔を預ける形になってしまった
今度は私の方が一瞬硬直して動きを止めてしまった
その間にマスターは必死にクリンチの形で
私の身体にしがみつく
（……！）
ハア
ぷにゃ
ぷにゃ
ぷにゃ

ハァ
ハァ
ハァッ
はぁ

ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ずり落ちそうな体をマルタさんの身体をよじ登るように
ズリズリと肌を押し付けながら何とか体勢を立て直す
お互いの熱い吐息で白い湯気が見えそうなほど
湿気と熱気を持った体を押し付け合う…
ハア
はぁ
(マルタさんの柔肌が汗でぬめって…)
思わずマルタさんの肌触りを全身で堪能してしまう
あまりの気持ちよさに身震いしてしまいそうだ。
少しづつ体力が回復してくるにつれ
お互い体を離そうとしなくなった時間は
自動ゴングが鳴るまで続いた
カーンッ!

ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、
マスターはずり落ちそうな体ズリズリと肌を押し付けながらハア…、ハア…、ハア…、ハア…、
お互いの熱い吐息で白い湯気が見えそうなほど湿気と熱気を持った体を押し付け合う…
私の身体をよじ登るように何とか体勢を立て直す
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
（マスターの火照った身体が汗でぬめって…）
思わずマスターの肌触りを全身で堪能してしまいそうだ。
あまりの気持ちよさに身震いしてしまいそうだ。
少しづつ体力が回復してくるが
お互い体を離そうとしないルーレット
自動ゴングが鳴るまで続いた時間は
カーンッ！

ハァ
ハァッ
ハァ
はあ
ハァ
はあっ
はあっ

ゴングが鳴り、お互いが重い足取りでコーナーに戻る。
ハアハア…、ハアハア…、ハアハア…、ハアッ…
身体が重く、だるく、熱くて痛い…
スツールに座っている1分間はあっという間に過ぎ去っていく。
（強い…、やっぱりマルタさんは強い…）
お互いに体力は底をつき、次のラウンドが決着のラウンドになるだろうという予感をお互いに感じ取っていた
ハアッ
ハア
はあっ
ハア
はあっ

ゴングが鳴り、
お互いが重い足取りでコーナーに戻る。
「ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハアッ…」
身体が重く、だるく、熱くて痛い…
スツールに座っている1分間は
あっという間に過ぎ去っていく。
（マスターのパンチを侮ってたわね…）
お互いに体力は底をつき、
次のラウンドが決着のラウンドになるだろう
そういう予感をお互いに感じ取っていた
ハアッ
ハア
はあっ
ハア
はあっ

ドゴッ!!

カーンッ！ ラウンドが始まり、ふたり、磁石が引き合うように リング中央に向かって飛び出していく
〈マルタさんが与える試練に打ち勝って、俺はマルタさんに認められるんだ…っ！〉
同時に右ストレートと左ストレートを繰り出すと それは同時にお互いの顔に着弾した
バグンッ！！

カーンッ！ ラウンドが始まり、ふたり、磁石が引き合うように リング中央に向かって飛び出していく
（マスターに負けるわけにはいかないでしょ…っ！）
同時に右ストレートと左ストレートを繰り出すと それは同時にお互いの顔に着弾した
バグンッ！！

ズキッ!!

（うぶ…っ…）
マルタさんの強烈な右ストレートに意識を吹き飛ばされそうになる
それでも体勢を立て直し、半ば無意識に同じパンチを繰り出す。
だがそのパンチは
追撃で踏み込んできていたマルタさんの
右ボディストレートをカウンター気味に
貰う結果となってしまった。
ぶえっ!!
ドボオッ!!
ぶえっ!?
噛み締めたマウスピースの隙間から
絞り出された液体がほとばしる。
ぐちゃっとマルタさんの拳で内臓が潰された嫌な感触…
だが俺は逆に腹部の痛みで吹き飛びかけた意識を取り戻した

(く……っ……)
マスターの強烈な左ストレートに意識を吹き飛ばされそうになる
それでも私は体勢を立て直し、半ば無意識に同じパンチを繰り出す。
だがそのパンチは体勢を崩しながら打つ
死にパンチとなってしまった。
しかしそれは追撃で踏み込んできていた
マスターの左パンチに私の右ボディストレートを
カウンター気味に合わせる事となり
結果的に会心のラッキーパンチとなった。
ぶぎゃ!!!
ドボオッ!!!
ぶぇっ!?
絞り出された液体がほとばしる。
ぐちゃっと私の拳の奥でマスターの内臓が潰される感触…
(もらった…)
私はこの気持ちいい感触に優越感すら感じてしまっていた。

ッ!?
ドゴ!!

「沈め…っ…！」
マルタさんが俺にとどめを刺さんと右フックを繰り出す
だがそれよりも早く俺の反撃の右フックがマルタさんの左頬にカウンターで届いていた
バゴンッ！！
「ぶふぇっ！？」
ぶふぇっ!?

「沈め……っ……！」
私はマスターにとどめを刺さんと右フックを繰り出す
だがそれよりも早くマスターの反撃の右フックが
私の左頬にカウンターで届いていた
バゴンッ！！
「ぶふぇっ！？」
ぶふぇっ!?

ドゴォォォ
メリッ!!
ぶるん
いっ…!

ぶるんっ
メリッ!!
続けざまにマルタさんのボディへボディアッパーを突き入れる
ドボオッ!!
ぐぐぷっ……!
マルタさんの腹筋を貫いて内臓をえぐり潰す感触が拳に伝わってくる
くっ、だが俺の方もスタミナが限界だ……

ドメリッ!!
ぶるんっ
マスターは続けざまに私のボディへボディアッパーを突き入れた
ドボオッ!!
『ぐぷっ…!』
マスターの拳が私の腹筋を貫いて内臓をえぐり潰してくる感触
(ぐえ…っ、まずい…、息が…)

ドガッ
ボコッ

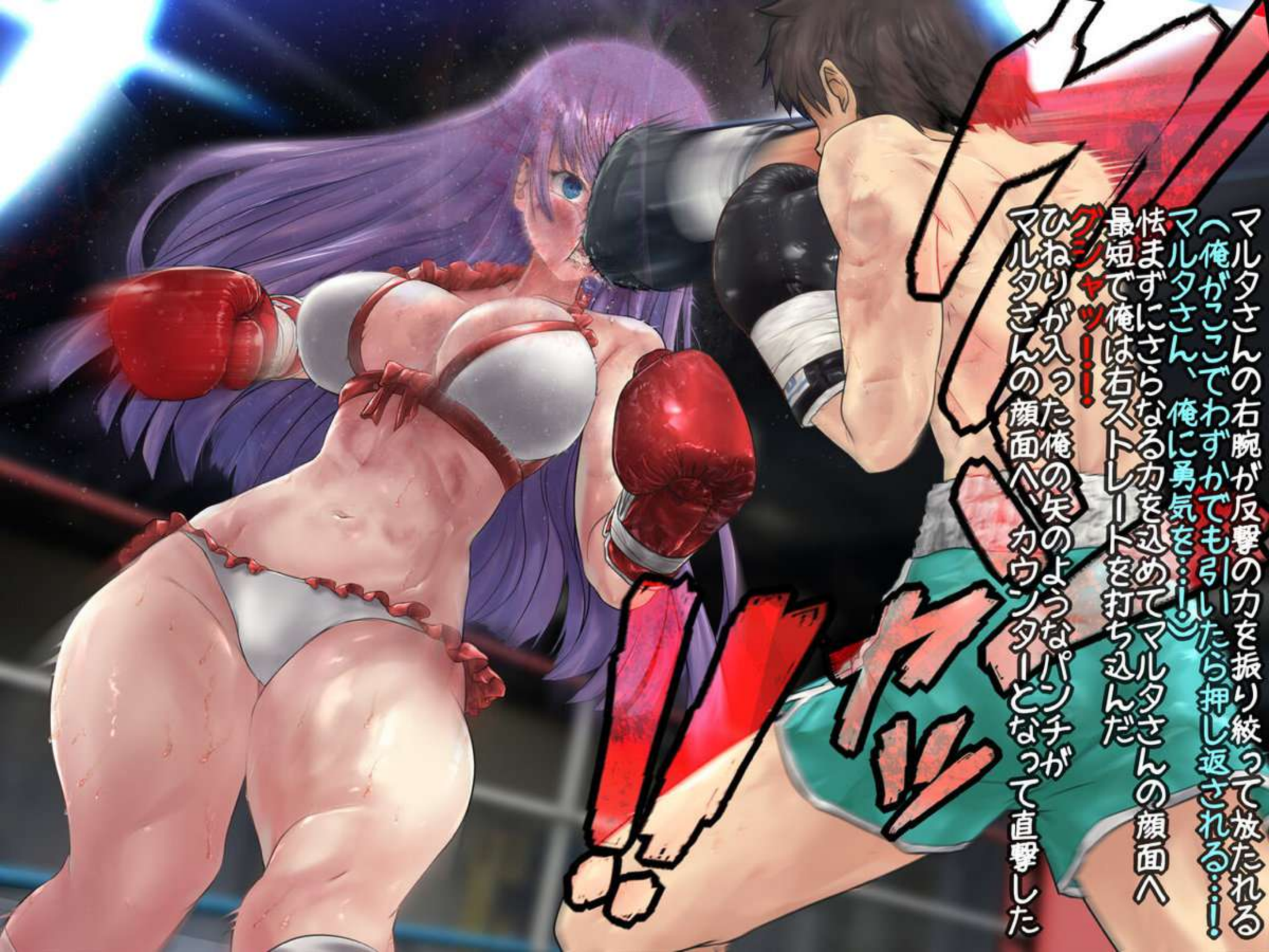
ぶふっ!!
ラッシュ!!
(これで決めないと負ける……!)
俺は意を決して最後のスタミナを絞り出し、息を止めてマルタさんに連打を打ち込んでいく
グバシングヤッ!!!
『ぶふっ!!!』
『うぐっ!!!』
右フック、左フック…
俺はマルタのパンチをガードできず
マルタのパンチはその身に受け入れ
グローブにさんはマルタさんの柔らかい頬肉を
ブーー拳で弾き飛ばす感触が伝わる

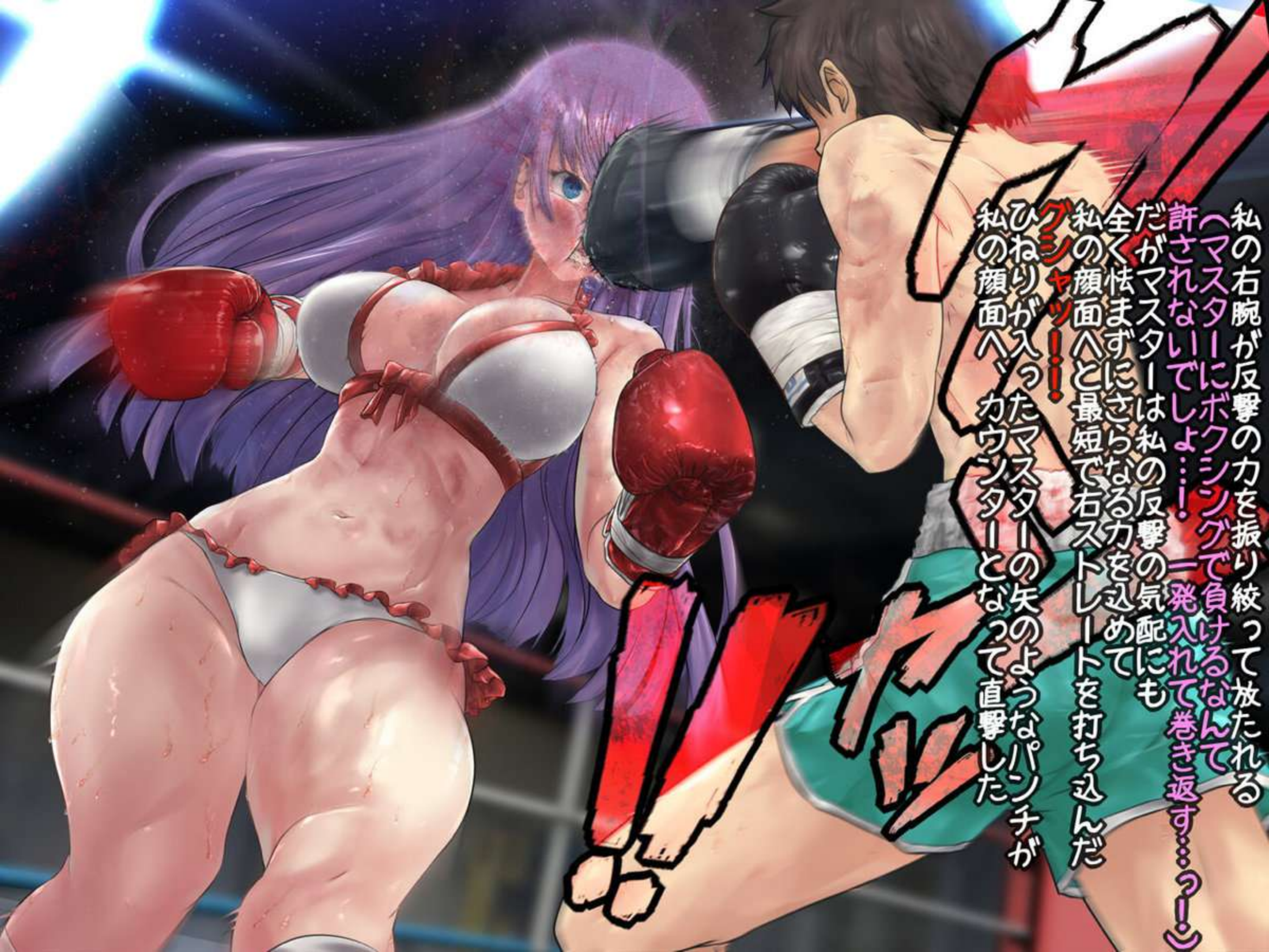
（このまま押し込まれたらマズい……！）
マスターはここぞとばかりに
私に連打を打ち込んでくる
グバッ！！
シングッ！！
ヤッ！！
『ぶふっ！！』
『うぐっ！！』
ぶふっ!!
ラッシュ!!
右フック、左フック…
マスターのパンチを私はガードできず
その身に受け入れる事しかできない
私の柔らかい頬肉を
マスターのグローブが容赦なく弾き飛ばす

ドゴッ!!
ビクンッ…
ぶぼっ
キリ…
ドゴッ!!
ぐらぐら…
ぐぼっ
キリ
ぶふっ!?

(これで…!これで決める…!
イっちまえマルタさん!)
無呼吸で一心不乱に
ロープに詰まったマルタさんを連続で打ち続ける
バグッ!ドゴッ!グシャッ!!
うぐっ…ぶふっ!?ぐふっ…
パンチを受けるたびにマルタさんの顔や体から
汗とよだれの飛沫がキラキラとしぶいて飛んでいく
うぐっ…
ぶふっ!?
パンチの連打でマルタさんの身体が
足が浮き上がるほどロープに押し付けられ
ロープとコーナーポストが金属的な悲鳴を上げる
(もう…息が…)
俺の攻撃の嵐がわずかに緩んだ気配に
マルタさんの瞳に力が宿った気がしだ
ぶぱっ
ドゴッ

ロープに詰まった私を、好機と見たマスターが一心不乱に連続で打ち続ける
バグッ！ドゴッ！グシャッ！！
うぐっ…ぶふっ！？ぐふっ…
パンチを受けるたびに私の顔や体から汗とよだれの飛沫がキラキラとしぶいて飛んでいく
うぐっ…
ブンッ
ぶふっ!?
ぶぱっ
ドゴッ
ゲ
ぐぶっ…
パンチの連打で私の身体が足が浮き上がるほどロープに押し付けられロープとコーナーポストが金属的な悲鳴を上げる
（ぐぶっ…ぐっこのままじゃ…沈む…）
暴力の嵐の中、私は覚悟を決めて最後の反撃する力を拳に込めた


マルタさんの右腕が反撃の力を振り絞って放たれる
〈俺がここでわずかでも引いたら押し返される…！
マルタさん、俺に勇気を…！〉
怯まずにさらなる力を込めてマルタさんの顔面へ
最短で俺は右ストレートを打ち込んだ
グシャッ！！！
ひねりが入った俺の矢のようなパンチが
マルタさんの顔面へ、カウンターとなって直撃した


私の右腕が反撃の力を振り絞って放たれる
《マスターにボクシングで負けるなんて許されないでしょ…！一発入れて巻き返す…っ！》
だがマスターは私の反撃の気配にも全く怯まずにさらなる力を込めて
私の顔面へと最短で右ストレートを打ち込んだ
グシャッ！！
ひねりが入ったマスターの矢のようなパンチが
私の顔面へ、カウンターとなって直撃した

ドガッ
ドガッ
あう…

『あう…』マルタさんが弱々しい声を吐きだして
とうとう俺に隙を見せた
あう…
（マルタさん…っ）
『俺のパンチで…イけっ！』
俺の渾身の力を込めた右アッパーが
マルタさんのアゴに吸い込まれる
グシャッ！！
（俺のグローブがマルタさんに届いた…！）

『あう…』意識が飛びかけて、思わず私は弱々しい声を吐きだして
マスターに隙を見せてしまっていた
(マスター…っ…)
『俺のパンチで…イけっ！』
あう…
マスターが渾身の力を込めた右アッパーが
ノーガードの私のアゴに吸い込まれる
グシャッ！！
(マスターの顔…、縦に流れて…見えなく…)

ボキッ!!
ボキッ!!
ボキッ!!

ボコッ
ボコッ
ボコッ

ドカッ!!
ドクターのクローブがリングを突き破り深く直撃し私の身体が宙に浮いて飛ばされる
ドクターはパンチを決めた後直ぐに私の身体が宙に浮いて飛ばされる
ロ、ロ、ロ、ロ…
私は断末魔の叫びをあげて白目を剥いて絶命する
(ア)(ア)(ア)な……ー。)
それは私に敗北を感じさせるのに十分な一撃だった
ボ
ボ
ボ
空中で私の口から零れたアクアペリーズが
次の瞬間に
私の身体と共に、地球を巡る人工衛星のように
この宇宙を漂っている…
ブクブクッ…

仕掛け
あうぅ…！
はぁ
はぁ
ボトッ

宙に浮いたマルタさんの肢体は派手な音を立ててハードランディングでリングに墜落し吹き飛ばされたマウスピースが一瞬遅れてぽとっと湿った音を立ててマットに転げ落ちた。
「あうっ……！」
「はあ、はあ……、はあ……、やった……！」
呼吸も絶え絶えな状態にもかかわらず俺は思わずそんな言葉が口をついて出てしまう
あうっ…！
はあ
はあっ
ポトッ

宙に浮いた私の身体は派手な音を立ててハードランディングでリングに墜落し吹き飛ばされたマウスピースが一瞬遅れてぽとっと湿った音を立ててマットに転げ落ちた。
「あうっ…！」
「はあ、はあ…、はあ…、やった……！」
半失神状態の私にマスターのそんな声がおぼろげに届く
（まだ…、まだやれる…っ…）
あうっ…！
はあ
はあっ
ボトッ

ワン
ツー
スリー
ゆメッ
あっ
あっ…
ビクッ
ビクッ

「がふっ…」
マルタさんがか細い息を吐いて後頭部をマットに落とした。
事切れる生き物の最後に鳴き声のように

俺のアッパーカットが胸元に擦れて露わになったマルタさんの巨乳がまぶしい…。
カウントを数える事すら忘れるところだったが気が付いてマルタさんにカウントを入れ始める。
「ワン、ツー、スリー…」
「あっ、あっ…」
マルタさんが苦しげにうめき声を吐き出す。

「がふっ…」
私はか細い息を吐いて後頭部をマットに落とした。
事切れる間際のように
ツー
スリー
あっ
ゆメッ
びくっ…
ビクッ
ビクッ
アマ
お胸
意
マ
ス
識
っ
っ
元
ッ
ス
タ
ー
の
パ
タ
ー
ト
が
ぱ
っ
と
露
わ
に
な
る
…。
数
上
の
え
空
で
い
る
閉
じ
こ
え
て
い
な
い
…
ワン、ツー、スリー…
途
切
れ
る
ウ
ン
ト
を
擦
れ
カ
ウ
ト
で
あっ、あっ…
（ダメなのに…っ、マスターにボクシングで負けるなんて許されないのに…っ）
そんな思いだけで苦しげにうめき声を吐き出す。

ナイッ!
ナイッ!
ぷしゅ…
ぷしゅ…
は…
はぁ…
ぷしゅ…
ぷしゅ…
ぷしゅ…
ボカ
ボカ

「ファイブ、シックス…」
マルタさんが俺のカウントに合わせるかのように「ぴくぴくと痙攣する

ナイン！

テン！

「は…、はふ…っ…」

ぴく…

ぴく…

ぴく…

は…

はふ…

プルン

プルン

（セイマンホルブ
ナうりゃマ
もへほへ
ルタさんの身体が一際びくびくと痙攣する
マルタさんの股間に俺の勝利で終了した
ママルルタさんとの試合は俺の勝利で終了した
マルタさんのパンチでイった…？）

「イ…っ……、イク……っ！！！」

エイト、……「ピースが
マトピースが
ウスピースが
立てる…）
おたまで
口の中には帰れないだろうな）
勝負が決した瞬間
テンカウントを
のんが気の
転湯
テンカ！」

ポカ

ポカ

「ファイブ、シックス…」
私の身体がマスターのカウントに合わせるかのようにぴくぴくと痙攣する
「は…、はふ…っ…」
ナイン！
テン！
ぴく…
ぴく…
は…
はふ…
ぴく…
ぷるん
ぷるっ
「セブン、エイト、ナイン…」
（マスターにボクシングで負けるなんて
マダメなのに…
マスターのパンチに屈服するの…、
こんなのに気持ちいいだなんて…っ♥）
ナイン、テン！」
勝負が決した瞬間
私の身体は一際びくびくと痙攣してしまう
イ…っ……イク……っ♥♥♥

パン
パン
パン

マルタさんの痴態を晒したK○姿を見て俺はもう我慢できなくなって矢も楯もたまらずマルタさんに覆い掛かる
『マルタさん♥マルタさんっ♥』
パンパンパンパンパンパンッ！
俺の有無を言わせないバックからのピストンに耐えられずマルタさんがケモノのような声を出してあえぐ
『おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥』
『マルタさんもう我慢できないんでしょ？俺のアッパーでイっちゃって、おまんこぐちょぐちょになってるじゃない♥』
パン
パン
プルン
プルン
ぷるん
ぷるん
おっ♥
おっ♥
ギシ
おっ♥
おっ♥
ロープの軋みを利用して跳ね返ってくるマルタさんのお尻にどんどん連続カウンターの様にペニスを突き入れていく
『マスターのっ♥おちんぽでっ♥』
ボコボコにっ♥ギシ
負けさせられちゃうっ……♥』
パン

マスターは私の痴態を晒したK○姿を見て
矢も楯もたまらなくなったのか身動きできない私に襲い掛かってきた
「マルタさん♥」「マルタさんっ♥」
パンパンパンパンパンパンッ！
私はマスターの有無を言わせないバックからのピストンに耐えられず
ケモノのような声を出してあえぐ
「おっ♥」おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥
「マルタさんももう我慢できないんでしょ？
俺のアッパーでイっちゃって、
おまんこぐちょぐちょになってるじゃない♥」
パンッ
プルン
プルン
プルン
おっ♥
おっ♥
ギシ
おっ♥
ぷるん
ぷるん
おっ♥
パン
パン
マスターはロープの軋みを利用して跳ね返る私のお尻に
どんどん連続カウンターの様にペニスを突き入れてくる
「マスターのっ♥」「おちんぽでっ♥」ギシ
ボコボコにっ♥ 負けさせられちゃうっ…♥

パンパン
パンパン
パンパン
パンパン
パンパン
パンパン
あっ
あっ
あっ
ぎゅっ
しゅっ
しゅっ

今度はマルタさんをリング上に押し倒して
ボコボコにしたマルタさんの顔を眺めながら
正常位で挿入してマルタさんのおまんこを
乳海攪拌のようにぐちょぐちょとかき回すと、
マルタさんに勝利した満足感と征服感が
波のように押し寄せてくる。
そのリズムに合わせて俺は腰をピストンさせて
マルタさんを犯していく。
ピストンのリズムに合わせてマルタさんの巨乳が
ぶるんぶるんと波打つ。
マルタさんも俺の突き入れに反応して
気持ち良さそうに声を上げる
あっ♥
あっ♥
あっ♥
あっ♥
やばっ…
やっぱりマスターのおちんちん良い…っ♥

マスターは今度は私をリング上に押し倒して
ボコボコにした私の顔をねっとりと眺めながら
正常位で挿入して私のおまんこを
勝利を味わうようにぐちょぐちょとかき回す。
異教徒の軍勢に敗北して蹂躙されるような屈辱感と被虐感。
（でも…っ、こんな感覚がこんなに気持ちいいなんて…
私ってこんなマゾだったのかなあ…っ♥）
マスターは私のそんな気持ちにを察したのか
さらに獣のように私を犯していく。
ずちゅ
くちゅ
マスターのピストンのリズムに合わせて私のおっぱいが
ぶるんぶるんと波打つ。「あっ♥あっ♥あっ♥」
思わずマスターの突き入れに反応して
気持ち良さそうに声を上げてしまう
「やばっ…やっぱりマスターのおちんちん良い…っ♥」
あっ♥
あっ♥

ビィィィ

射精感が最高潮になったところで
マルタさんの中に遠慮なく射精する
ビュブッ！ビュルルくッ！！
「ふああっ♥」
マルタさんの中にどぷどぷと注がれていく大量の精液
「マルタさん最高…、気持ちーいい…♥」
ビュブ
ビュルルくッ♥
どぷ
ぐちゅ
ぐちゅ

ビュルルッ♥
ビュルルルルッ♥
どぷっ
ぐちゅ
ぐちゅ…
（一番奥に押し付けてきたぁ…♥来るっ♥）
マスターがおちんちんを私の膣壁に押し付けるとどくどくと私の中に遠慮なく射精する
ビュブッ！ビュルルッ！！
「ふあぁっ♥」
私の中にどぷどぷと大量の精液が注がれてくる
「マルタさん最高…、気持ちーい…♥」

ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ビクッ
どろ…
たらーっ

たっぷり射精ましたね……♥
ペニスを引き抜くとマルタさんのおまんこから
ディープキスしたように糸を引いて垂れ落ちる
荒い息を吐いて一息ついた後
マルタさんの中に射精したこってりした精液が
どろ……
たらーっ
んっ、ハァ マルタさん……♥
そんな様子に釣られて
マルタさんにねっとりとしたキスをする
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ

たっぷり射精ましたね……♥
二人、荒い息を吐いて一息ついた後
マスターがおちんちんを引き抜くと
私のおまんこから射精されたこってりした精液が
ディープキスしたように糸を引いて垂れ落ちる
んっ、ハァ、マルタさん……♥
そんな様子に釣られてか
マスターが私にねっとりとしたキスをする
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
どろ……
たらーっ

あうっ♥
ぱちぱち
ガク
ギシ
ぱちぱち
ぱちぱち
ぱちぱち

『ま…、まだするの…？』
マルタさんを抱き上げてロープに押し付けると
そのままロープの反動を利用して連続ピストンを開始する
『あうっ♥』『おんっ♥』『はうっ♥』
ギシギシとロープが掛けられる荷重に
悲鳴を上げるのと同じタイミングで
マルタさんも嬌声を上げる
（されるがままのマルタさんかわいい…♥）
あうっ♥
ぱちゅ
ガク
ガク
おんっ♥
はうっ♥
ギシ
ゆさ
ゆさ
ずぷ
ぱん
ぱん
ぱん
ぱん
ぱちゅ
マルタさんのおっぱいに胸板を押し付けながら
密着したまま、さらに獣のように
腰をマルタさんに打ち付ける
『またイくよ、マルタさんっ♥』びゅぐびゅぐっ！
今度も遠慮なくマルタさんに中出しする

『ま…、まだするの…？』
マスターは私を抱き上げてロープに押し付けると
そのままロープの反動を利用して連続ピストンを開始する
『あうっ♥おんっ♥はうっ♥』
ギシギシとロープが掛けられる荷重に
悲鳴を上げるのと同じタイミングで
私も嬌声を上げる
（マスターのされるがままになってる…っ♥）
あうっ♥
ぱちゅ
ガク
ガク
おんっ♥
はうっ♥
ギシ
ゆさ
ゆさ
ずぷ
ぱん
ぱん
ぱん
ぱん
ぱちゅ
ぱちゅ
私のおっぱいに胸板を押し付けながら
密着したまま、さらに獣のように
腰を私に打ち付けてくるマスター
『またイくよ、マルタさんっ♥』びゅぐびゅぐっ！
今度も遠慮なく私の膣に中出しする

ギリッ
ガク
ぶるぅ
ぶるっ
ぶるぅ
ぶるっ
ぶるぅ
ぶるっ

ふくっ、気持ちよかったあ…♥
おぶぅ…、うぶぅ…
マルタさんはロープにもたれてグロッキーになったボクサーのようになってしまった
マルタさん、イっちゃったね…♥
マルタさんからペニスを引き抜くとぼとぼとと精液がリングに垂れ落ちる
マルタさん、また俺とボクシングしようね♥
そう言って失神状態のマルタさんに再びキスをした
おぶぅ
うぶぅ、
ボッ
ガク
ガク
ガク
ガク
ぷる
ぷるっ
ポタ
ポタ…

「ふくっ、気持ちよかったあ…♥」
「おぶぅ…、うぶぅ…」
私はロープにもたれてグロッキーになったボクサーのようになってしまった
(マスターのおちんぽで磔にされちゃったあ……♥)
「マルタさん、イっちゃったね…♥」
マスターが私からペニスを引き抜くとぼとぼとと精液がリングに垂れ落ちる
「マルタさん、また俺とボクシングしようね♥」
マスターはそう言って失神状態の私に再びキスをするのだった
おぶぅ
うぶぅ、
ボッ
ガク
ぷる
ぷるっ
ガク
ガク
ボタ
ボタ…